「令和６年度の事業」を終えて

今年度は、４つの基本方針のもと当面する６つの重点推進事項を中心に、各校から選出された所員、研究員及び専門員と共に計画した各種事業を滞りなく実施することができました。所員等をはじめ各学校の皆様のご理解とご協力に深く感謝いたします。

今年度は、専任所員２名が代わったこともあり、各事業等も新たな視点で見直しをかけたところです。
特に、各事業の推進に当たり、運営のテーマである「『学び続ける学校』づくりへの支援」の実現に向けて、各事業の関連性をもたせ、４月の「年度始め授業公開」から「事業報告会」までを、事業サイクルとして捉え、岩見沢市の教育づくりに取り組んできました。

また、研究事業では、４つの研究部会の成果を「教頭・研究担当者研究協議会」で動画を使った報告を行い、取組の具体を示し各学校で共有しました。各学校においても研究成果が公開研究会で報告され、求められる授業像を提案する内容が多々見られてきたところです。

さらに、コンサルティング活動においては、各学校が積極的に研究所の機能を活用し、若手教員への指導やベテラン教員の力量バージョンアップなど、それぞれの学校で課題を明確にされ、教員と子どもの変容につなげることができました。

当研究所の役割は、学校の研究・研修を支え提供することを通して人材の育成を図ることです。次年度においても、若手教員からベテラン教員まで、すべての教職員を対象に事業の充実を図ってまいりたいと考えております。

皆様には、今年度の事業成果への忌憚のないご意見・ご感想をいただくことをお願いし、今年度の当研究所に対するご支援に感謝し、事業報告書の発刊のお礼とさせていただきます。
どうもありがとうございました。

令和７年２月吉日

岩見沢市立教育研究所長　砂　川　昌　之

岩見沢市立教育研究所　事業報告書　目次

１　令和６年度の運営方針と事業内容　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１

当面する６つの「重点推進事項」について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４

（１）各学校の校内研究の充実に向けた支援

（２）「AI 教材」活用に向けた調査・研究

（３）コミュニティ・エリアへの支援

（４）研究・研修の ICT 化の推進

２　事業報告

（１）「Ⅰ調査」事業について（概要のみ掲載）・・・・・・・・・・・・・・・・・・　６

・全国学力・学習状況調査結果の分析（報告書参照）
・全国体力・運動能力、運動習慣等調査の分析（報告書は今後作成予定）
・デジタル社会科副読本「いわみざわ」の改定
・遠隔学習の企画・運営

（２）「Ⅱ研究」事業について

・「教科等」研究部会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
・「道徳科」研究部会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０
・「外国語」研究部会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２８
・「情報教育」研究部会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３６

（３）「Ⅲ養成」事業について

・養成講座（経営塾、養成塾、実践塾）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４４

（４）「Ⅳ研修」事業について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４８

・「岩見沢の教育を語る」研修講座　・特別支援教育研修講座
・「特別支援教育支援員」研修講座　・事務職員研修講座
・「食物アレルギー」研修講座　・「救急・救命」研修講座
・ＩＣＴ活用に関する研修講座Ⅰ　・ＩＣＴ活用に関する研修講座Ⅱ
・不登校対策研修会　・教育講演会
・教頭・研究担当者研究協議会（第１～４回）

（５）「Ⅴ連携」事業について

・北海道及び全国教育研究所連盟との連携・・・・・・・・・・・・・・・・・・５６
・北海道教育大学岩見沢校等との連携・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５７

（６）「Ⅵ普及」事業について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５８

・情報の発信（所報「いわみざわ」、研究所「ブログ」）
・岩見沢市教科書センターとしての機能

３　施設の貸与及び利用状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６０

４　令和６年度研究所職員一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６１

令和６年度　岩見沢市立教育研究所

教育行政方針

〇新しい時代に対応できる力の育成　〇豊かな人間性と健やかな体を育成する教育の推進
〇育ちと学びを支える教育環境の充実　〇信頼と期待に応える開かれた学校づくり

運営テーマ

「子どもが煌めく教育」の推進
「学び続ける学校」づくりへの支援

運営方針

①岩見沢市が進める教育実現に向けてのコンサルティング活動の推進
②岩見沢市が進める教育の実践検証の推進
③岩見沢市が進める教育を実現できる教員の養成
④岩見沢市が進める教育の発信

Ⅰ　調査

◎今日的な教育課題に係る調査
- 教育行政方針推進に係る調査・実態把握
- 全国学力・学習状況調査の分析
- 全国体力・運動能力、運動習慣等調査の分析
- デジタル社会科副読本の活用
- 「AI教材」活用に向けた調査・研究

Ⅱ　研究

◎今日的な教育課題の解決を図る研究・指定校事業の推進
〇「教科等」研究
〇「道徳科」研究
〇「外国語科」研究
〇「情報教育」研究

＊研究部会と指定校の連動
◇各学校への研究支援

Ⅲ　養成

◎教職員の資質能力向上のための、キャリアに応じた養成講座の開催
〇養成講座
- 経営塾　・養成塾　・実践塾

〇職能向上講座
- 養護教諭　・事務職員　・若手教員　等

〇研究担当者養成
教頭・研究担当者研究協議会（4回）

Ⅳ　研修

◎教職員の専門的力量向上のための研修講座の開催
- Ⅰ「岩見沢の教育を語る」研修講座
- Ⅱ　特別支援教育研修講座
- Ⅲ　特別支援教育支援員研修講座
- Ⅳ　事務職員研修講座
- Ⅴ「食物アレルギー」研修講座
- Ⅵ「救急・救命」講習会
- Ⅶ　ＩＣＴ活用に関する研修講座Ⅰ
- Ⅷ　D-いわみざわ授業活用研修会
- Ⅸ　不登校対策研修会
- Ⅹ　教育講演会
- Ⅺ　ＩＣＴ活用に関する研修講座Ⅱ

当面する６つの重点推進事項

①各学校の校内研究の充実に向けた支援
②今日的な教育課題解決に向けた授業改善への実践的研究
- 「教科等」研究部会
- 「道徳科」研究部会
- 「外国語科」研究部会
- 「情報教育」研究部会

③三塾の充実
経営塾　養成塾　実践塾
④「AI教材」活用に向けた調査・研究」
⑤コミュニティ・エリアへの支援
⑥研究・研修のＩＣＴ化の推進

Ⅴ　連携

◎北海道教育研究所連盟との連携
- 道研連研究大会への参加

◎教育大学岩見沢校との連携
- 出前授業、研修講座への講師協力

◎施設開放・運営
- 研究団体、大学、地域連携型教育への開放

Ⅵ　普及

◎情報の発信
- 所報「ie-Labo」年2回紙面配布
  年3回ブログ配布
- 教育情報の提供　・ブログ発信
- 研究・研修のICT化

◎デジタル社会科副読本の普及
◎教科書センター機能
- 教科書の展示

令和６年度　岩見沢市立教育研究所　研究構造図

令和６年度　学校教育の推進から

１．新しい時代に対応できる力の育成

（１）一人一人の子どもを主語にした教育づくりの実現（自立した学習者の育成）

①「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業づくりによる確かな学力の追究

②身に付ける資質・能力を明確にし、子どもの対話により、「教える」べきことを教え、「考えさせる」べきことを考えさせる授業の展開

③「学習スキルの向上」と「学習ルールの徹底」による子どもたちの学びの形成

④「傾聴・受容・共感」の信頼関係に基づく学習集団づくりの強化

（２）「組織体」としての学校力を高める取組の一層の推進

①学校として統一性・一貫性のある校内研修の推進と活性化

②カリキュラム・マネジメントに基づいた特色ある教育課程の工夫・改善

③「学校づくり＝授業づくり」の視点に立った「学び続ける学校」への組織的な改善

（３）小中が一貫した学力向上の取組の推進

①標準学力検査、全国学力・学習状況調査による検証と対策の促進

②コミュニティ・エリアにおける義務教育９カ年を見通した組織的な学力向上

③ピア・サポートの推進及び「目指す子ども像」の共有

（４）ＩＣＴの効果的な活用と情報活用能力を高める教育の推進

①GIGAスクール構想による１人１台端末を効果的に活用した授業づくりの推進

②デジタル教材等を活用した授業実践と基礎学力の定着に向けた取組の推進

（５）外国語指導助手（ＡＬＴ）の有効活用と「英語が使える岩見沢の子ども」の育成

（６）北海道教育大学岩見沢校との連携を図った教育活動の強化

（７）各種事業を活用した学校力及び学力の向上

一人一人の子どもを主語にした教育づくりの実現

Ⅱ　研　　究

「教科等」研究部会

◎「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業の構築

◇めざす授業像

①主体的・対話的で深い学びの実現

②子どもが主体となる指導過程
- 身に付けさせる資質・能力の明確化
- 子どもとの対話の重視
- 「教える」べきことを教え「考えさせる」べきことを考えさせる授業展開

③子どもが主体となる教師の意図的な関わり
- ICT等を活用できる学習スキルと学習ルール
- 子どもファーストの学習規律

④子どもの振り返りによる評価
- メタ認知を高める評価
- 授業動画分析による授業評価

「道徳科」研究部会

◎多様な価値観の中で自尊感情や自己有用感・達成感・規範意識を確立できる道徳科授業の実現

◇めざす授業像
- 多様な価値観を知り葛藤しながら考える授業
- ふるさとのよさを基盤に生き方を考える授業
- 命の大切さを実感できる授業

◇授業改善の視点
- 道徳的事象を自分事としてとらえられる工夫
- 多様な考えの交流
- 葛藤を通して自己の確立

（※生成AI活用による多様な考え方の探究）

ピア・サポート
学習意欲
コミュニケーション力
自己有用感
学びの社会性

「外国語科」研究部会

◎外国や外国語への関心を高め積極的に外国語を用いてコミュニケーションをめざす授業の構築

◇めざす授業像
- 外国の文化や慣習への興味・関心が高まる授業
- 外国語の学習を通して自国文化の関心や理解が高まる授業
- 外国の方々と積極的にコミュニケーションを図ることができる授業

◇授業改善の視点
- 外国の文化や外国語への関心が高まる場の設定
- 相手意識や目的意識をもった必然性ある「言語活動」の在り方
- 小中の連携による系統的で積み上げができる計画等の在り方

※「理解と表現」の充実をめざすICTの活用

「情報教育」研究部会

◎ICTの積極的な活用を通して学習スキルを高め子どもの主体的な学びをはぐくむ授業の推進

◇めざす授業像
- ICTを有効活用した個々の学びの実現
- 生成AIを活用した先進的な学びの実現
- AIドリル等を活用した基礎学力を身に付ける学びの実現
- 遠隔等、不可能を可能にする学びの実現

◇授業改善の視点
- ICTの効果的な活用
- ICTネットワークを活用した広域かつ専門的な学び
- ICT活用を通した情報モラル等の学習
- 生成AI活用による創造的な学びの実現
  （※必要に応じて「道徳部会」との連携）
- AIドリル等を活用した基礎学力の定着

◇ICTの利活用を通した学び続ける教師・学校の実現
- ICT活用研修の実施

令和６年度　岩見沢市立教育研究所　事業等推進検証マネジメント
学び続ける学校
授　業　改　革
教職員の育成
岩見沢の教育を語る会
年度始め授業公開
研究指定校授業
教育講演会
研究指定校公開研
岩見沢型ピア・サポート研修会
年10日間開催
教頭・研究担当者研究協議会
年４回開催
三塾の開催
経営塾
養成塾
実践塾
子どもの姿での検証
Back casting
Agile
Try & Error

当面する６つの「重点推進事項」について

教育研究所の今年度の運営方針に示した６つの「重点推進事項」のうち、部会研究と三塾については、それぞれの取組と成果等について項を設けて事業報告書に記載するが、ここでは、残りの４つの事業の概要と成果等について簡単に報告する。

１　各学校の校内研究の充実に向けた支援

（１）コンサルティング活動

４つの運営方針に基づき、各学校の要請や研究所からの声かけなど、積極的なコンサルティング活動を軸に教職員の育成となるよう推進してきた。

今年度は、特に、各学校が自校の教職員育成にかかる課題を明確にし、若手教員の育成やベテラン教員の力量の向上など、積極的な活用が見られた。

（２）教頭・研究担当者研究協議会（詳細は、Ｐ５４の「研修事業」参照）

昨年度に続き、同協議会を４回開催し、これまでの岩見沢市で取り組んできた授業改善について共有するとともに、各学校の特色を生かした校内研究について交流した。成果の交流では、探究的な学びを育む授業改善や個別最適化を図る複線型の授業スタイル、一人一人の子どもの学びを育むフリー学習を設けるなど、今日的な学びを指向する研究内容の充実が見られ、全市的な取組の向上が図られた。

２　「AI 教材」活用に向けた調査・研究

（１）「情報教育」研究部会と連動した調査・研究

① 基礎学力の定着を目指した AI ドリル等の活用

②「生成ＡＩ」を利活用した学習活動の在り方について検証

「情報教育」研究部会において研究内容に位置づけ指定校において研究実践を行った。（詳細は、Ｐ３６「研究事業」参照）

（２）「生成ＡＩ」の教育的な活用の可能性についての研修

研修講座「ICT 活用研修講座Ⅰ・Ⅱ」において「生成 AI」について学ぶ講座を設け、「生成 AI」について知るとともに、実際に校務で使用する場面や授業で活用する場面などを想定し研修を深めた。

３　コミュニティ・エリアへの支援

コミュニティ・エリアへの支援について、当研究所としては、研究指定校のエリアを中心に支援に努めてきた。

研究指定校を中心とした栗沢エリア・北村エリアにおいては、外国語の授業公開に当たり、小中で学びの連続性や系統性に留意し、連続した指導が展開されるよう、各段階における到達ゴールや定着 can do リストを作成するなど、授業構想から連携を図り、その充実に向けて取組を進めた。

また、幌向エリア・上幌向エリアでは、大学教授を講師とした共通課題に基づく研修を実施し、小中連携の視点から子どもの学びの発達を踏まえた授業づくりを具体化できるようにした。

本来的なコミュニティ・エリアへの支援については、まだまだ研究すべき点が多く、引き続き次年度への課題としたい。

４　研究・研修のＩＣＴ化の推進

研究・研修のＩＣＴ化の推進については、Webexboard を積極的に活用するとともに、研究所で実施する研修等で、複数のモニター設置による効果的な講義や演習を行うなど、ＩＣＴ環境を積極的に利用して進めてきた。

また、年度初めの教育研究所研究指定校打ち合わせ、一部の所内会議、社会科副読本の作業部会など、Webexboard によるテレビ会議を行い、会議の効率化を図った。

さらに、全教連の神奈川大会における国立教育政策研究所の情報提供や、道研連網走大会における記念講演については当研究所でライブで視聴できるよう設定し、所員や希望する管理職への公開を行ったほか、教育講演会に当日参加できなかった教職員に対する後日視聴の対応を行うなど、著名な講師による最新の教育の動向に生で触れることのできる機会の拡充に努めることができた。

2 事業報告
「1 調査」事業について

「Ⅰ　調査」事業について

１　全国学力・学習状況調査結果の分析（詳細は「令和６年度全国学力・学習状況調査　調査結果報告書」参照）

（１）全国学力・学習状況調査　調査結果報告書（岩見沢市版）の作成

令和６年度の全国学力・学習状況調査については、４月１８日（木）、市内小学校第６学年と中学校第３学年の全児童生徒が参加した。

その結果、岩見沢市の児童生徒の学力の状況は、

小学校国語は全国平均とほぼ同様、小学校算数は全国平均より低く、

中学校国語・数学は全国平均とほぼ同様となっている。

研究所では、今回の調査結果を受け、市内版の調査結果報告書を取りまとめた。

その中では、国語及び算数・数学の調査結果から見える課題等と指導改善のポイント、全国平均と比べて３ポイント以上差がある問題についての課題等を示した。

また、児童生徒質問紙調査からは、平日と休日における１日当たりの家庭学習の時間（１時間以上）など、早寝早起き・朝食などの基本的生活習慣、児童生徒の学習意欲、規範意識や自己有用感など、過去５年間を経年変化で捉えてその傾向を把握できるようにした。また、ＩＣＴの活用状況の項目では、全国・全道と比較した結果について示している。

（２）「令和６年度全国学力・学習状況調査結果活用検討委員会」の開催

今年度実施の調査結果を受け、本市児童生徒の学力・学習状況を把握・分析して教育指導の充実に資することを目的に、「令和６年度全国学力・学習状況調査結果活用検討委員会」（構成員　校長会２名、教頭会２名、主幹教諭２名、市内小・中学校の授業実践者４名、市教育委員会指導室２名、教育研究所３名）を設置し、12月１８日に当教育研究所で開催した。

委員からは、「学習者主体による授業改革の推進が取り組まれている中、子どもたちの資質・能力の育成には、意欲を含めて学習スキル・学習ルールなどの学習に向かう基盤となるものをしっかりと指導し身に付けさせていくことが必要である」「長文を読むことに課題があり、文章を読み解く力を身に付けさせることや、解法のテクニックを教えることも必要ではないか」「チャレンジテストを有効に活用してはどうか」など、現在までの状況や改善に向けての取組が議論された。

今後については「各学校が取り組むべき岩見沢市の３つの方策」について、その方向性が確認され、①「身に付けさせる資質・能力を明確にし、子どもとの対話により『教える』べきことを教え、『考えさせる』べきことを考えさせる授業の展開」　②「子どもの学習意欲や目的意識を高める組織体制の整備・拡充と全校での取組」　③「学力の向上と学校生活の安定の基盤となる『子どもの基本的生活習慣の確立』を、各中学校区で推進する」が共通認識された。

２　全国体力・運動能力、運動習慣等調査の分析

小学校第５学年と中学校第２学年の全児童生徒を対象として、毎年、文部科学省が５月から７月の期間に実施している全国体力・運動能力、運動習慣等調査に今年度も参加した。

岩見沢市の児童生徒の体力等の状況については３月にまとめる「調査結果報告書」で詳細を示す予定である。

令和６年度の調査結果を見ると、体力合計点では小学校は男女ともに全国平均とほぼ同様、中学校は男女とも全国・全道平均より低い。また、１週間の総合運動時間は全国と比べ、小学校の男女ともに全国平均を上回っているが、中学校の男女は下回っている。

種目別では、小学校の男女ともに８種目中６種目が全国平均を上回っている。中学校では、男女ともに全種目（９種目）において全国平均を下回った。

今年度についても昨年度と同様に分析を行い、結果を踏まえた各学校が取り組むべき方策などについて報告書で示していく。

３　デジタル社会科副読本「いわみざわ」の改定

昨年度の８月から使用を開始したデジタル社会科副読本「いわみざわ」に関わり、今年度も編纂委員会を組織し、「Ｄ－いわみざわ授業活用研修会」の実施や「指導計画評価規準【暫定版】」の作成作業を行った。

（１）小学校社会科副読本「いわみざわ」の改訂等に係る編纂委員会

〇第１回　令和６年６月６日（木）

・委嘱状交付

・本編纂委員会の作業内容、作業部会の設置、Ｄ－いわみざわ授業活用研修会の実施　等

〇第２回　令和６年１２月６日（金）

・指導計画評価規準【暫定版】、副読本の内容の見直しについて　等

（２）Ｄ－いわみざわ授業活用研修会

６月２７日（木）、岩見沢市立中央小学校において、デジタル社会科副読本の授業における活用法や指導法等を研修し、小学校中学年における社会科学習の一層の充実に資するため、「Ｄ－いわみざわ授業活用研修会」を実施した。

３年生、「工場の仕事」の内容で公開された授業は、この学習のあとに控えている「パイプ工場」の見学に向け、その計画として調べたいことを考える授業であった。

副読本に収録された動画や資料をもとに児童が積極的に考え、社会科としての「比較」や「関連性」といった視点を意識させることで子ども一人一人の思考が深まり、これからのデジタル社会科副読本を活用した授業の方向性の一つを示していた。

授業後の研究協議においては、公開された授業の感想や、デジタル社会科副読本の活用について、各学校における実態や実践例等について交流が行われた。

（３）「指導計画評価規準【暫定版】」の編集

デジタル社会科副読本「いわみざわ」の内容に対応した、指導計画及び評価規準が記載された「指導計画評価規準【暫定版】」について、編纂委員全員で分担して編集し、来年度以降各小学校での３・４年生の社会科の指導に有効に活用できるようにした。

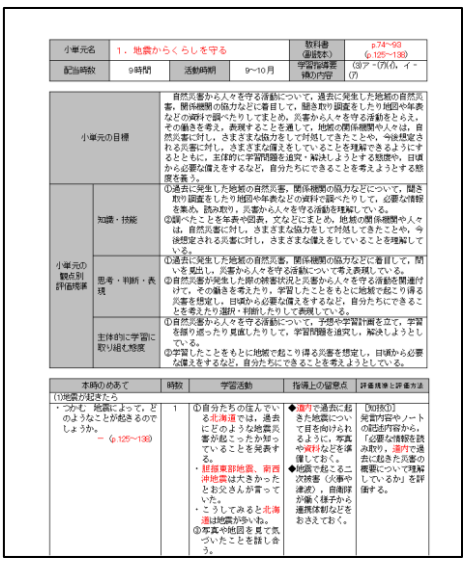
令和7年度(2025年度)　小学校社会科用

4年指導計画評価規準【暫定版】

令和６年（2024年）１２月６日版

※指導計画中表における「評価規準と評価方法」の例に、【　】で示している観点は、主として評価したことを記録に残す場面を示しています。

岩見沢市教育委員会



小単元名	１．地震からくらしを守る			教科書(単元名)	p74~93 (p.125~130)
配当時数	9時間	活動時期	9~10月	学習指導要領の内容	(3)ア・(7)ウ, イ・(7)

小単元の目標		自然災害から人々を守る活動について、過去に発生した地域の自然災害、関係機関の協力などに着目して、聞き取り調査をしたり地図や年表などの資料で調べたりしてまとめ、災害から人々を守る活動をとらえ、その働きを考え、表現することを通して、地域の関係機関や人々は、自然災害に対し、さまざまな協力をして対処してきたことや、今後想定される災害に対し、さまざまな備えをしていることを理解できるようにするとともに、主体的に学習問題を追究・解決しようとする態度や、日頃から必要な備えをするなど、自分たちにできることを考えようとする態度を養う。
小単元の観点別評価規準	知識・技能	①過去に発生した地域の自然災害、関係機関の協力などについて、聞き取り調査をしたり地図や年表などの資料で調べたりして、必要な情報を集め、読み取り、災害から人々を守る活動を理解している。 ②調べたことを年表や図表、文などにまとめ、地域の関係機関や人々は、自然災害に対し、さまざまな協力をして対処してきたことや、今後想定される災害に対し、さまざまな備えをしていることを理解している。
	思考・判断・表現	①過去に発生した地域の自然災害、関係機関の協力などに着目して、問いを見出し、災害から人々を守る活動について考え表現している。 ②自然災害が発生した際の被害状況と災害から人々を守る活動を関連付けて、その働きを考えたり、学習したことをもとに地域で起こり得る災害を想定し、日頃から必要な備えをするなど、自分たちにできることを考えたり選択・判断したりして表現している。
	主体的に学習に取り組む態度	①自然災害から人々を守る活動について、予想や学習計画を立て、学習を振り返ったり見直したりして、学習問題を追究し、解決しようとしている。 ②学習したことをもとに地域で起こり得る災害を想定し、日頃から必要な備えをするなど、自分たちにできることを考えようとしている。

本時のめあて	時数	学習活動	指導上の留意点	評価規準と評価方法
(1)地震が起きたら				
・つかむ　地震によって、どのようなことが起きるのでしょうか。 ― (p.125~130)	1	①自分たちの住んでいる北海道では、過去にどのような地震災害が起こったか知っていることを発表する。 ・胆振東部地震、南西沖地震は大きかったとお父さんが言っていた。 ・こうしてみると北海道は地震が多いね。 ②写真や地図を見て気づいたことを話し合う。	◆道内で過去に起きた地震について目を向けられるように、写真や資料などを準備しておく。 ◆地震で起こる二次被害（火事や津波），自衛隊が働く様子から連携体制などをおさえておく。	【知技①】 発問内容やノートの記述内容から，「必要な情報を読み取り，道内で過去に起きた災害の概要について理解しているか」を評価する。

４　遠隔学習の企画・運営

今年度は、各学校の取組として、南小学校、岩見沢小学校、メープル小学校から実践の報告があった。

（１）他地域との交流を図る遠隔学習の実施

①　実施校　南小学校と沖縄県石垣市立石垣小学校
　　第４学年

②　実施日　令和６年５月３０日（木）９月１３日（金）

③　教科等　国語科・総合的な学習の時間

④　ねらい　岩見沢市や北海道の様子を、沖縄県石垣市の子どもたちに伝え、交流することを通して、自分の住んでいる土地のよさを伝えることや、他の地域の様子の違いや共通点を知るなど、適切なコミュニケーションの力を養う。

⑤　学習の展開

５月３０日（木）　国語科

「３０００Km 離れた人と友だちになれたら楽しそう」という課題のもと、北海道や岩見沢市の様子について紹介文を書き、互いにテレビ会議システムを使い交流した。

９月１３日（金）　国語科

前回の交流をもとに、自己紹介を作成し、テレビ会議システム上で互いに紹介し合うなど交流を深めた。

今後の予定

「雪プロジェクト」の学習で「雪の見たことがない友だちに雪の良さを紹介しよう」と題して、テレビ会議システムを通じて交流する予定である。

⑥　成果

自分たちの住む北海道とは違った風土をもつ石垣市の子どもたちと交流することで、自分たちとの生活の違いや共通点を見いだしたり、自分たちのまわりのことを見つめ直したりするなど、深い洞察力や、相手への共感する気持ちなど、コミュニケーションの力が高まった。

（２）広州日本人学校との交流

①　実施校　岩見沢小学校と中国広州日本人学校
　　第６学年

②　実施日　令和６年１２月１０日（火）

③　教科等　総合的な学習の時間
　　「ふるさと大発見～北海道・岩見沢の魅力を紹介しよう」

④　ねらい　〇他の地域と交流することで、自分たちの住む地域の良さを学ぶ
　　〇他の地域の地理的、歴史的、現在の状況を学ぶ
　　〇仲間と協力して資料をまとめ、発表することを通して協同する大切さを学ぶ

⑤　学習の展開

【岩見沢小学校】

〇調べ学習

・中国について　・広州について　・日本人学校について

〇まとめ学習

・わかったことについてまとめる　・交流先への質問の決定

〇広州日本人学校からの質問に回答する

・グループごとに質問回答動画の作成

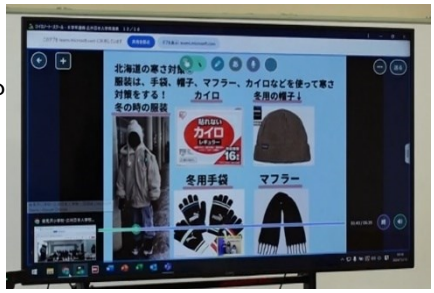
〇北海道・岩見沢市・岩見沢小学校のアピールビデオの作成

〇北海道・岩見沢市・岩見沢小学校クイズの作成

〇当日の交流イベントの内容決定と運営

⑥　遠隔学習（交流会）内容の具体

〇広州日本人学校から岩見沢小学校への質問



【国際理解】

・みなさんがもっている中国の印象（イメージ）はどうですか？

【日常に生活】

・北海道に住んでいて困ることはありますか？

・気候を調べてみて、とても寒いことが分かりました。

・みんなの寒さ対策を教えてください。

【学校について】

・岩見沢小学校の特別なイベントについて詳しく知りたいです。

例:サケの放流、ホタテ釣り、わくわくフェスタなど

・岩見沢市は豪雪地帯だと知りました。豪雪地帯ならではの活動を詳しく知りたいです。

例:スキーの授業など

・学校で環境問題（ＳＤＧｓに関する）への取組を行っていますか？

・学校には、２つもグラウンドがあると知りました。使い分けはどのようにしていますか？

・学校の「誇り」とは何ですか？

・来年、広州日本人学校は、創立３０周年を迎えます。歴史が長い岩見沢小学校では、創立１３０周年や１３５周年では、どんな取組やイベントを開催しましたか？

〇岩見沢小学校から広州日本人学校への質問

【中国・広州に関すること】

・みなさんは中国語を学んでいますか。日本語と中国語ではどちらが難しいですか。また、ある程度会話ができるようになるにはどのくらいかかりますか。

・パンダはやはり人気のある動物ですか。動物園の様子や国の中でパンダがどのように大切にされているのかを教えてください。

・日本と中国の習慣の違いを感じることはありますか。

・市内には日本食を食べることができるお店はありますか。また、納豆や醤油など日本特有の食材を手に入れることはできますか。

・どのようなお菓子やアイスがありますか。日本では食べたことのない味や形のスイーツはありますか。

・中国にはどのようなコンビニがありますか。売っているものや中の様子は日本と似ていますか。

・インターネットで調べると中国の祝日は日本より少ないとわかりましたが、本当に少ないのですか。中国には日本に似た行事や祝日はありますか。

・中国の子どもたちに人気のあるゲームはどのようなものですか。

・岩見沢には「いわみちゃん」などのご当地キャラクターがいます。中国や広州にはキャラクターはいますか。

【日本人学校・日本人学校の皆さんに関すること】

・調べると「給食はなく、お昼は自分の家に帰ったり、食べ物を買いに行ったりすることが

ある」とわかりましたが、みなさんはお昼ご飯をどうしていますか。昼休み時間は長いのですか。

・放課後、塾へ行ったり、習い事をしたりする人はいますか。また、放課後はどのように過ごしていますか。

・クラブ活動などの時間はありますか。

⑦　子どもたちの感想から

交流後の子どもたちの感想からは、次の４点について気づきや発見が読み取れた。

ア. 文化の違い

・言語: 中国語の発音や漢字の使い方について

・食文化: 中国料理の多様性や美味しそうな料理について

・交通費: タクシーやバスの料金が日本よりも安いこと

イ. 学校生活の違い

・登校方法: 広州日本人学校の生徒がバスで登校していること

・昼食: 広州日本人学校では給食がなく、お弁当を持参すること

・下校時間: 広州日本人学校の下校時間が岩見沢小学校よりも遅いこと

ウ. 技術と支払い方法

・電子決済: 中国では電子マネーの使用率が高いこと

・アプリの利用: ウーバーイーツや LINE に似たアプリが中国でも使われていること

エ. 個人的な感想と興味

・発表の質: 広州日本人学校の生徒の発表が聴きやすく、自分も真似したいと思った。

・新しい興味: 中国や広州に対する興味が湧き、もっと知りたいと思った。

・交流の楽しさ: 交流を通じて楽しい時間を過ごし、また交流したいという意見が多くあった。

⑧　成　果

今回、子どもたちが広州日本人学校との交流を通じて学んだ成果について考察すると、以下の点が挙げられる。

ア. 異文化理解の深化

子どもたちは、中国の文化や生活習慣について多くの新しい発見をした。特に、中国語の発音や漢字の使い方、食文化の多様性、交通費の違いなど、普段の生活では触れることのない情報を直接学ぶことができた。これにより、異文化に対する理解が深まり、偏見や誤解の解消に繋がると考えられる。

イ. 比較と対照による学び

日本と中国の学校生活や日常生活の違いを比較することで、自分たちの生活を客観的に見つめ直す機会となった。例えば、登校方法、昼食、下校時間の違いなどを知ることで、自分たちの生活習慣を再評価するきっかけとなった。

ウ. 技術と便利さの認識

中国での電子決済の普及や便利なアプリの利用について学ぶことで、技術の進歩とその利便性についての認識が深まった。これにより、子どもたちは技術の活用方法やその利点について考える機会を得ることができた。

エ. コミュニケーションスキルの向上

広州日本人学校の生徒たちの発表を聴くことで、自分たちの発表スキルを向上させたいという意欲が生まれた。聴きやすい発表や効果的なコミュニケーションの重要性を学び、自分たちもそれを実践しようとする姿勢が見られた。

オ. 新しい興味と好奇心の喚起

交流を通じて、中国や広州に対する興味が湧き、もっと知りたいという好奇心が刺激された。これにより、子どもたちは自発的に学び続ける意欲を持つようになり、異文化交流の重要性を実感した。

カ. 感謝と尊重の心

交流を通じて、相手の文化や生活を尊重し、感謝の気持ちを持つことの大切さを学ぶとともに、異なる背景を持つ人々との交流を通じて、尊重の心が育まれた。

このように、子どもたちは広州日本人学校との交流を通じて、多くの貴重な学びを得ることができた。

（３）コミュニティ・エリアにおける小中の児童会・生徒会の交流

① 実施校　メープル小学校・志文小学校・清園中学校
児童会・生徒会

② 実施日　令和７年　１月　２８日（火）

③ 学習内容等

④ ねらい　清園中学校区の３校の小学校と中学校の児童会・生徒会の主催の下、３校の交流行事の実施を通し、３校の児童生徒の主体的な交流の実現を図る。

⑤ 学習の展開

実施交流行事名　SMS 児童会・生徒会企画

８月２８日（水）３校の児童会・生徒会役員の交流（Webexboard による交流）
・３校の役員の紹介
・実施交流行事の内容検討

１月２８日（火）　インフルエンザ蔓延のため
SMS 児童会・生徒会企画は中止

⑥ 成　果

残念ながら１月２８日は中止となったが、３校のリーダーが、校区のスローガンである「自己決定」「挑戦」の精神の下、自分たちで企画を行った。この経験は、児童生徒の代表として自分たちで学校をよりよく改革していこうとする意識の醸成につながり各校に還元されていくことが期待される。

また、清園中学校へ進学する２校の６年生にとっては、互いを知るよい機会になるとともに、中学校の紹介等で安心して進学できるという気持ちが高まった。

また、児童会・生徒会が主催することで、みんなが仲良く楽しめる行事を計画する経験を経て、より主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながった。

「Ⅱ　研究」事業について

「教科等」研究部会

１　部会テーマ

「仲間の声を受けとめ、考えを深める子どもの育成」
　～子どもの声がつながる授業の創造を通して～

２　研究目的

（１）子どもの声がつながる授業を創造するための教師のかかわりを検証する。
（２）子どもの考えを深める学習スキルを研究する。
（３）子どもの姿を基盤とした評価を検討する。

３　テーマを具現化するための研究の視点

（１）指導事項の明確化
（２）課題作り
（３）学習スキル
（４）ICT の活用
（５）教師の発話
（６）評価

４　研究年次

令和６年度から令和７年度（２年次研究の１年目）

５　研究実践の具体

（１）　これまでの研究成果及び課題の整理と研究テーマの設定

今年度については、部員が大幅に交代したこともあり、これまでの研究の成果と課題をふまえ新たな２年次の研究テーマを次のような考えの下、設定した。

昨年度までの課題を次の２点と押さえた。

①「子どもの声が繋がる授業」を目指す必要がある。
- 子どもと創る授業の質を高めるためには、教師と子どもによる一問一答型の授業から一つの問いをきっかけに子ども同士で複数の意見や疑問が出て活発な話し合いが行われる授業を実現しなければならない。そのためには、発問の吟味はもとより、安心して自分の考えを言える「学級風土」をどう創っていくかについて研究を深める必要がある。

② 適切な授業評価による授業改善が必要である。
- 全教師が授業を見る目を養い、授業の視点、見えている事象の受け止め方を共有する必要がある。そのことが組織的な授業改善に繋がる。また、研究授業が日常の授業の改善に生きるかどうかもこの点にかかっている。

これらの課題を押さえ、当部会としては、「授業づくり」は「子どもの育成」を主とするという基本的な考えに立ち、教室で子どもたちが「深い学び」を実現するには、「声を受け止める場」が必要と考え「子どもの声がつながる授業の創造」を通して「仲間の声を受け止め、考えを深める子ども」を目指す子どもとしてテーマを設定した。

また、研究テーマの目指す子どもを次のように定義し研究を進めた。

仲間の声を受けとめる子ども	**考えを深める子ども**
・「仲間」の対象は友だちだけでなく、教師や保護者などを含む。「他者」とも置き換えられる。 **・「声」は話した言葉に限らず、書いた言葉や作品などを含む。「情報」とも置き換えられる。**	**・「考えを深める」のままでは曖昧であるため、①考えを変える②考えの根拠を増やす③考えに自信をもつ等、より具体的に想定する必要がある。**

（２）　６つの研究の視点の具体

①　視点１　指導事項の明確化

ア　単元構造図

児童・生徒の実態をふまえた上で、学習指導要領に基づいた単元の学習をデザインする必要がある。そこで、今年度は実態と目標をそれぞれ分析したうえで単元の見通しをもつため、下に示すような「単元構造図」を作成した。

4学年 国語科単元構造図 「大事な言葉や文に気をつけて要約しよう『ウミガメの命をつなぐ』」

単元について（学習指導要領から）

〇『ウミガメの命をつなぐ』を読み、結果と考察の違いを理解し、興味をもったことを紹介するために中心となる語や文を見つけて要約する。
・段落相互の関係に着目しながら、考えとそれを支える理由や事例との関係などについて、叙述を基に捉えること。……思判表Ｃ(1)ア
・目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約すること。……思判表Ｃ(1)ウ
・文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつこと。……思判表Ｃ(1)オ
〇言語活動
『ウミガメの命をつなぐ』を読み、文章の一部を引用・要約しながら考えたことを説明したり、意見を述べたりする活動。……思判表Ｃ(2)ア
〇教材について
名古屋港水族館は、絶滅危惧種であるアカウミガメを保護する目的で研究を進めてきた。この研究は、日本・アメリカ・メキシコとウミガメが回遊し産卵する可能性のある3国の共同研究である。4つの実験を関連付けて読むことで、水族館の役割を捉えウミガメを守ろうと尽力する人々の思いを想像することができるだろう。さらに、興味をもった部分を要約して紹介し合う活動を通して、一人一人の見方・考え方の違いに気づくことになるだろう。

児童の実態

学習課題に向かって粘り強く取り組むことができる。学習の振り返りは、100字以上という制限を設けて書くことを習慣づけてきた。本文を部分的に要約する経験は、児童の書く力を高めるだろう。読むことにおいては、本文中の語句を正確に理解できないことが予想される。提示物

目指す児童の姿

学習後、感じたことを進んで伝えようとする児童の姿を目指す。興味を持った文章と自分の考えを丸ごと受けとめてもらえる体験は、思ったことを進んで表現しようとする源となるだろう。そのためにも、機械的に要約の方法を教えるのではなく、続く学習活動と連動した学び

めるというような作業に終始してしまいがちなことがあげられる。
本単元の学習を終えた時、ウミガメをはじめとした絶滅危惧種やその保護活動に興味・関心を抱いたり全体を概括するような要約文を書いたりする姿を目指す。その上で、同じ情報に触れても友だちと見方・感じ方の違いがあることをあらためて感じ、自己を見つめられるような学習展開を心がけていきたい。

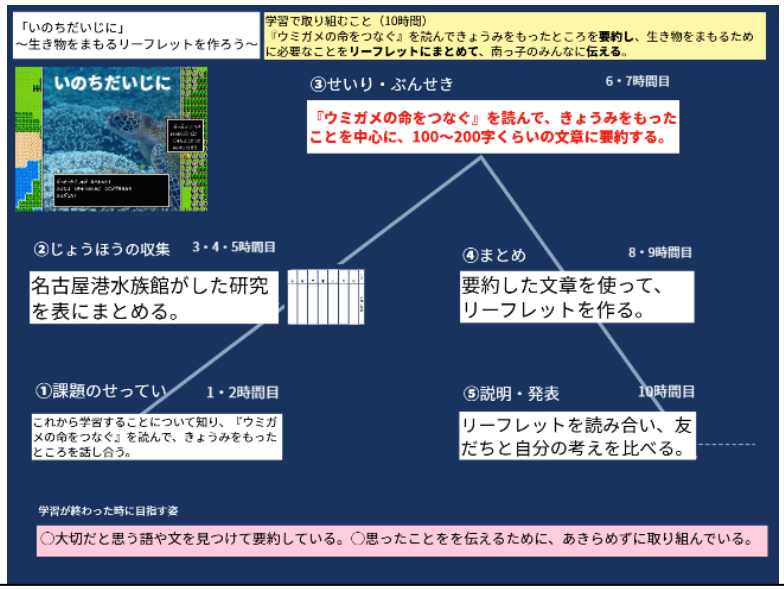
時	主な学習活動	重点評価			主な評価方法
		知	思	主	
一次	① 題名や単元とびらの2枚の写真を手がかりに、学習の見通しをもつ。			○	発表・ノート
二次	② 本文を読み、興味をもったことについてまとめ、友だちと話し合う。			○	行動観察・発表・ノート
	③ 「ウミガメのさんらん研究」について読み取る。	○			行動観察・発表・ノート・表
	④ 「子ガメを海に放流する研究」について読み取る。	○			行動観察・発表・ノート・表
	⑤ 2011年からの水族館の取り組みについて読み取る。		○		行動観察・発表・ノート・表
	⑥ 全体で表を確認し、振り返る。		○		行動観察・発表・ノート・表
	⑦ 興味をもったことを中心に、100～200字くらいに要約する。	○			発表・ノート・ロイロ
	⑧ 要約した文章を用いて、『ウミガメの命をつなぐ』を紹介する文章を書く。		○		発表・ノート・ロイロ
三次	⑨ 紹介文を友だちと読み合い、友だちの文章と自分の文章を比べて、自分との違いやよいところを見つけて伝え合う。			○	行動観察・発表・ノート

第４学年国語科「大事な言葉や文に気をつけて要約しよう」単元構造図

子どもの現在地と学習の到着地を言語化し、それらを結ぶ単元をつくるため、どのような「子どもに」、どのような「目標のもと」、どのような「計画で指導するか」を構造的にまとめていった。このような構造図にまとめることによって、指導者がその単元の指導事項を明確に理解することができると考えている。

イ　学びマップ

教師が指導事項を明確に理解していれば、子どもに単元の見通しを明確にもたせることも可能になる。例えば、南小では「学びマップ」を子どもと共有した。これは、単元構造図で整理した指導事項を子どもがわかるような言葉で整理したものである。実際、子どもは休み時間などにこれを見て、これからの学びの見通しをもつなど、学びの地図としての機能を果たしていた。



第４学年国語科「大事な言葉や文に気をつけて要約しよう」学びマップ

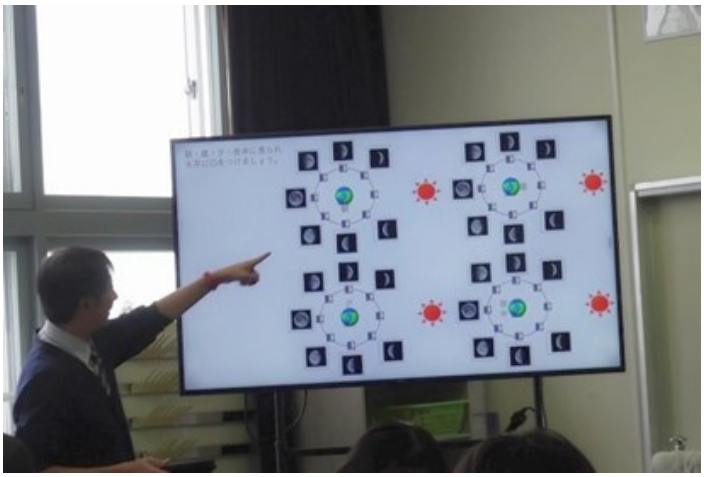
教師が明確にした指導事項は、子どもに確実に伝わるように示すことによって「学習事項」となる。単元構造図は、子どもが主体的に学ぶための１つの方法と言えるだろう。今後、この方法を効果・効率の両面から再検討したい。

②　視点２　課題づくり

これまでの授業研究では「課題」と「まとめ」の重要性が議論されてきた。子どもが自ら学習課題を作ることは自立した学び手として成長するために重要である。

子ども主体の課題意識を高めるためには、既習事項の確認や問題との出会わせ方を工夫し、子どもの言葉ややる気を引き出すことで、子どもが自ら学習課題を考えるように促す必要がある。

光陵中における理科の実践では、授業導入時に前時までの学習を確かめる問題に取り組んだ。



まず、問題について、じっくりグループで話し合いながら答えや考え方を確かめた。問題は、本時の中核となる課題に必要な既習事項を含んでいる。確認問題を終えて教師から課題が提示された時、自分事として課題を捉え、迷わずグループで解決に向かい始めていた。

本事例では導入の確認問題が課題へのいわゆる「橋渡し」として機能していたと言える。

ここでは、月の見える位置を考えるためには時刻・方角・満ち欠けなどの情報が必要になることが確かめられた。

本研究においては、課題への「橋渡し」として２つの機能を考えた。１つは、課題解決

の前提となる知識を一人一人が確認できることであり、解決に必要な材料を揃えることになる。

もう１つはグループで解決する学習形態が整うことであり、確認問題のグループ解決は子どもにとってアイスブレイクの効果をもつとともに、子どもにとって課題解決の必要感をもたせることができる。

また、本項では「課題」と一括りにして論じてきたが、「学習問題」「問い」などの用語の整理についても、引き続き議論が必要だろう。

子どもにとって「必要感のある課題づくり」＝「子どもが課題を作ること」と限定するのではなく、授業のねらいと子どもの学びの「橋渡し」となるような授業の工夫について報告した。

さらに、課題作りを子ども主体に限定せず、教師が意図的に関与する授業設計も重要である。なお、令和５年度「教科等」研究部会指導資料では「子ども主体の授業」づくりについて簡潔にまとめられているので、あらためてご参照いただきたい。（右の二次元コードで指導資料を参照できる）

③　視点３　学習スキル

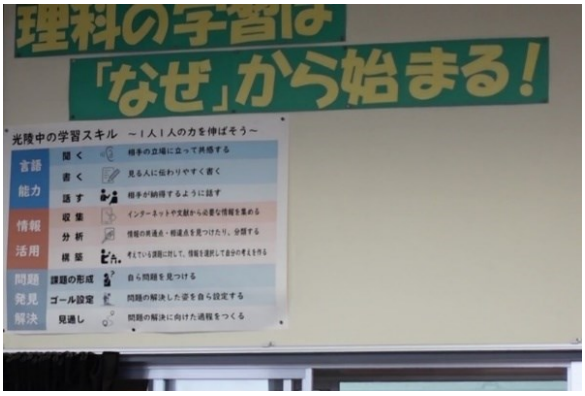
教室では、タブレットを用いることによって子どもの表現方法が多様化した。デジタルとアナログを効果的に組み合わせる方法とするなど、タブレットの活用については「とにかく使ってみよう」という段階から「効果的に使おう」という段階に移り変わってきている。

このような表現方法の多様化にかかわり重要と考えるのは「聞く」「読む」を統合して情報を受け取る力である。本項では、その中でも現代の子どもたちに必要な学習スキルとして「聞く」スキルを取り上げたい。

どの学校にも学習スキルに相当する学校全体で大切にしたい「学び方」があり、中には、各教室に掲示するなどして校内で一貫した指導に取り組んでいる。

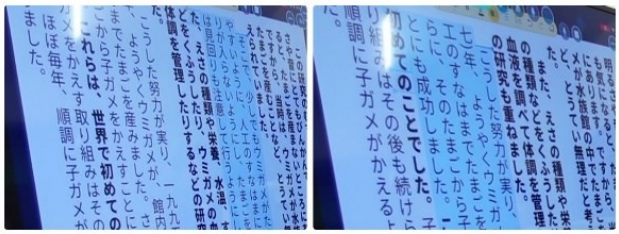
それらはおそらく、各校の実態に応じて作成されているものと考えるが、新たなものを取り入れるのではなく、それぞれの学校にある学習スキルにおける「聞く」スキルについて整理する必要がある。

その際、学校が掲げる学習スキルが、子どもたちにとって意味のある生きたスキルとして活用されているかどうか、各校が作成している学習スキルを見返すことが重要である。



④　視点４　ICT の活用

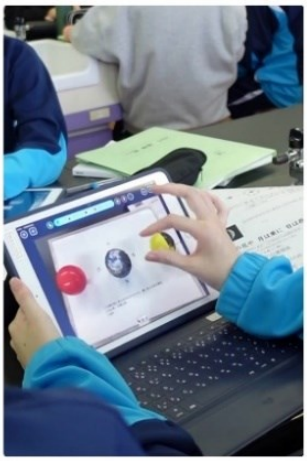
南小では、子どもが自分の進度に応じた学びを進められる国語の実践を行った。授業の説明に画面収録機能で撮影した動画を活用した。「要約」の学習で、その手順を３つに分けた動画を見せながら解説を加え、その動画をロイロノートの資料箱に入れて共有した。



提示した動画の説明を一度で理解できなかった子どもは、繰り返し動画を見たり、友だちと話し合いながら見たりして学習に取り組んでいた。早く終わった子どもが「ミニ先生」として友だちの助けを行う際にも、一緒に動画を見ながら教える場面が見られた。子どもが自分の進度に合わせて課題解決方法を選択できるとともに、共通の学習材として機能させた。

また、動画視聴サービスは、「単なる動画視聴」から「知りたいことの探索」へと意識付けが大切であり、ICT の活用方法をさらに工夫したいところである。

授業後の部員による協議においては、「動画を活用した意図的な話し合い場面を設定すると良かった」という意見が聞かれた。例えば、要約の際にどんな言葉を削ったか友だちと比べてみるなど、本時のねらいに合わせた意図的な話し合い活動の設定などの工夫が必要である。



また、光陵中の理科の授業ではロイロノートの機能によって子どもが情報を共有しながら学習を進めていた。学習のねらいに迫る発展課題に取り組む際には、地球・月・太陽の模型を撮影して説明する姿が見られた。

また、メンバーを入れ替えたグループ活動においては、自分の考えをよりわかりやすく伝えるため、導入時の確かめ問題を振り返りながら説明するなど、子どもが場面に応じた活用をすることができていた。教師が一つ一つ指示をせずとも子どもが自ら効果的な ICT の活用を選択していた。

活用の主体が子どもになることをふまえれば、活用におけるルール・マナーについても主体的に定めていくことが重要になるだろう。「情報教育」研究部会とも連携を図りながら議論を継続したい。

⑤　視点５　教師の発話

本部会ではこれまで「子どもの声を生かす」場面での発話を整理してきた。以下は、昨年度まとめられたものをもとにして今年度改善を図った表である。授業の一場面においてこれらを意図的に用い、子どもの変化を促していくことが大切である。

それぞれの発話がどのような効果をもつのかは、子どもや教室によって異なることも考えられ、今後、実践を通してその効果をさらに検証してみたい。

子どもの声を生かす授業に向けて

場面	教師のねらい	発話例
核心をつく発言をした	友だちの発言を、自分の言葉で表現してほしい。	○○さんが言ったことを、自分の言葉で説明してごらん。 ○○さんが言ったことを、もう一度説明してくれるかな。
発言に曖昧さがあった	具体的な言葉を引き出したい。 友だちが言いたいことを想像してほしい。	もう少し詳しく教えて。 例えば？ 今、○○さんが言いたいことを言える人？
説明を理解していない	わからないと言えるきっかけをつくりたい。	もう少し詳しく聞きたい人？
考えにこだわっている	物事を多面的に見てほしい。	違う考えの人いる？別のことを思った人いない？
考えに、視点が欠けている	気付いていない視点にも気づかせたい。	（視点を示して）～から考えると何が言える？
比較していない	対象を比較させたい。	比べてみよう。どんなことが言えるかな？
複数の根拠を見出せない	根拠が一つではないことに気がついてほしい。	根拠（理由）をいくつ挙げられる？
多面的にとらえていない	物事を多角的に見る視点を持たせたい。	○○の立場から見るとどんなことが言えるかな？
条件がはっきりしていない	考えを整理させたい。	必要な条件はなんだろう？説明してごらん。

⑥　評価

本研究においては、探究的な学習や個別最適な授業スタイルの展開における評価の考えについて述べる。

評価については、子どもの学びについて評価するという基本的な考えを踏まえ、指導と評価の一体化について、そのサイクルを確立することが重要である。

本研究においては、授業の終末における子ども自身の振り返りを大切にし、指導と評価の一体化を図っている。

その際、身に付けさせたい資質・能力、めざす子ども像を明確にし評価規準を作成し評価していくことが重要である。

前述した南小「国語科」のふり返りでは、要約文についての評価規準を明確にし、さらに、右に示したような子どものふり返り内容について言葉を拾うことで、教師も授業内容をふり返ることができ、次時の指導に生かすことで指導と評価の一体化を図った。

また、評価活動への ICT の活用は効果的であり、個々の細かな「学び」の内容を掌握できることはもとより、短時間で学級の全体の傾向を把握することで授業改善につなげることができる。

C	D	E
評価 １２３	ふりかえり（50字以上は青　100字以上は緑）	文字数
2	今日一番わかったことは、要約することがとても難しいと言うことです。やってみると、どこをカットしていいのか，だめなのかの判断が難しかったです。私は「ウミガメの命をつなぐ」の要約が途中までしかできませんでした。今は207文字です。	113
3	ようやく文を作るのが難しかったです。だけどまだ完成してはいません。ようやく文と自分のやつがごっちゃになりました。	56
3	今回の学習は要約文をやりました。どこを削って良いかわからなかったから難しかったです。要約文を書くのに大事だと思った事を見つけたかったけど見つけられなかったから次要約文を書く時には大事だと思ったところを見つけたいです。	108
		0
2	今日は要約をためしてみました。要約の使い方がわかったからリーフレットに今日学んだことをいかしたいです。要約で自分が大事だと思う場所を削ってやることがわかりました。	81
3	要約という言葉が大事だと、改めて思いました。ようやくという言葉を知りたいと思います。	42
		0
	1番長い文を要約しました。900文字ぐらいありました	

６　研究主体校・協力校との連動

研究主体校・協力校の６校はそれぞれ自校の研究主題に基づいて、校内研究が進んでいるところであるが、各校から派遣された６名の部員が本研究の内容に基づき、研究の視点に係る実践を持ち寄るなどして協議を重ねた。

また、南小と光陵中で実施された部会の研究授業の指導案検討と授業後の研究協議を行い、研究実践を深めることにより、研究主体校と協力校との実践内容の連携を図った。

７　成果と課題

今年度の実践から読み取れた成果と課題について次のようにまとめた。

【成果】

（１）教師のかかわりの検証

研究テーマの具現化を図るため特に、「仲間の声を受け止め」「子どもの声がつながる」という部分に着目し、そこへの教師のかかわりについて検証できた。具体的には、南小では、教師が子どもの発言を積極的に受け止め、発言を引き出すための質問を工夫することで、子どもたちの考えを深める授業の実現が可能となった。例えば、子どもが意見を述べた際に「それはどうしてそう思ったの？」と問いかけることで、さらに深い考察を促すなど、研究視点５を中心に「教師の発話」を研究整理したことは有効であると考えた。

（２）学習スキルの向上

子ども主体の授業の実現のためには、課題設定、個人による課題解決、集団による課題解決など、子どもの学習スキルを高める必要がある。光陵中で実施された理科の研究授業では、特に、「聞く」スキルを重視し授業の改善を図った。授業導入時に確認問題をグループで話し合いながら解決する場を設けることで、子どもたちが互いの意見を十分に聞き、考えを深める姿が見られた。

また、ICT の活用においては、個々の多様な表現の交流に際して、表現内容について深く聞き取ることで他の人との意見の相違に気付き、考えをさらに深める場面が多々見られるなど、「聞く」学習スキルの向上がめざす子ども、授業につながったと考えられる。

（３）ICT の活用

ICT の活用については、子ども主体の授業づくりには、欠かせないツールになっており様々な活用が図られている。本研究においても、各研究授業のねらいの達成のため様々な取組が見られた。

南小では、国語科の授業で要約の学習に動画を活用することで、子どもたちは動画を繰り返し視聴しながら自ら課題を解決したり、自分のペースで理解を深めたりすることができた。また、早く終わった子どもが「ミニ先生」として他の子どもをサポートする場面も見られるなど、学習の個別最適化に向けての可能性について検証できた。

（４）指導と評価の一体化

本研究では「指導事項の明確化」を図るため単元構造図を取り入れ学習指導要領の学習内容を確実に定着させるとともに、子どもたちの「ふり返り」について評価規準を明確に示すことで指導と評価の一体化を図ってきた。

南小学校の国語科では、子どもたちが要約文を作成するにあたり、要約内容、要約字数、要約キーワードなど、評価規準を明確にして、子どもたちが自分の学びをふり返る時間を設け、これにより、子どもが自らの学習内容の定着度を自覚するとともに、教師も授業内容をふり返り、次の授業に生かすことができた。

【課題】

（１）今後の研究課題

ICT の活用方法や評価方法について、数多くある取組から、今年度は一部について実践検証したものである。他の活用方法を試し、その効果・効率の両面からの再検討が求められる。

例えば、動画を活用した授業の効果を定量的に評価し、その結果を基にさらに効果的な活用方法を探るなど､次年度に向けて模索することが必要である。

（２）教師の発話の効果検証

研究の視点から、視点５「教師の発話」について、さらに、子どもに与える効果を検証する必要がある。例えば、特定の発話がどのように子どもの考えを深めるのか、具体的な事例を通じて検証し、その効果を明確にすることが重要である。

（３）課題作りの工夫

研究の視点から、視点２「課題づくり」について、子ども主体の課題作りを促進するための工夫が重要である。

例えば、既習事項の確認や問題との出会わせ方を工夫し、子どもの言葉ややる気を引き出す方法をさらに研究することが求められる。光陵中の理科の授業では、確認問題を通じて子どもたちが自ら課題を見つけ出し、解決に向かう姿が見られた。他教科や小学校の実践など、実践検証を広げ一般化していくことが求められる。

８　担　当

部長：髙橋　　周（南小学校）
部員：石田　　渚（中央小学校）　　戸井　一貴（東小学校）
　　川上　　透（日の出小学校）　　辻浦　一裕（光陵中学校）
　　阿部　駿也（東光中学校）

「道徳科」 研究部会

１　部会テーマ

「思いやりや感謝、生命の尊さなどについて自分との関わりで捉え、多様な感じ方や考えに触れながら、自らを高めようとする岩見沢の子どもの育成」

２　研究目的

（１）子どもが道徳的諸価値について実感できる場の工夫
（２）子どもが物事を多面的・多角的にとらえられる場の工夫
（３）評価方法の工夫改善

３　テーマを具現化するための研究の視点

（１）道徳的諸価値について実感できる指導の工夫改善
（２）多様な感じ方や考え方に触れられる指導の工夫改善
（３）自らの成長を実感できる評価の在り方

４　研究年次

令和６年度～令和７年度（２年研究の１年次）

５　研究実践の具体

（１） 道徳的諸価値について実感できる指導の工夫改善

「特別の教科　道徳」の学習については、道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己（人間として）の生き方についての考えを深める学習として、「考え、議論する道徳」へ転換を図ることが求められている。

本部会ではこれまでに、岐阜聖徳学園大学の山田貞二教授を招聘し「考え、議論する道徳」の授業への指導助言をいただいてる。今年度も、示範授業や講義から多様な感じ方や考え方を引き出す発問の在り方を取り上げ、研究のテーマに合わせながらその効果を検証している。

①　展開前半における中心的な発問（以下、中心発問）

授業で考えさせる道徳的諸価値について実感を伴わせるためには、子どもたちの思考を深めたり広めたりするための発問が重要である。学習する教材により、国語科における本文の読み取りのような主人公の心情や行動の把握から道徳的諸価値へ迫る「読み取り道徳」にならないよう、「自分だったら」「自分の生活の中では」など、子どもたちを教材に自我関与させながら学習をすすめることが必要である。

今年度は、特に自我関与のあり方を検証するため、検証内容を内容項目Ａ（主として自分自身に関すること）とＢ（主として人との関わりに関すること）に絞り、発問の工夫・改善を図ってきた。ねらいとする道徳的諸価値を追求するためのきっかけとなる中心発問は、教材に関わって行う学習（特に展開前半の学習）において、主人公の

▶展開前半における中心的な発問（中心発問）
思考にずれを起こす多面的な発問

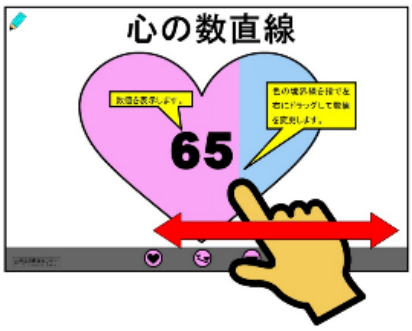
議論の発火点となる発問。
Aの項目では、価値や心理葛藤場面を取り扱い、どのように乗り越えたか問う。
Bの項目では、主人公の行為行動について視点を変えて考える発問が有効的である。

葛藤や感動、問題場面を取り上げ問うことで、どうやって葛藤などを乗り越えたかという部分を対話の中心とすることで多様な考え方を引き出し、議論の発火点とする発問となる。
　この時、子どもたちからどのような反応があるかを予想し、さらに深く考えさせたり拡散させて追求する補完的な補助（深化）発問を用意しながら、その後の議論につなげていくことが大切である。Ａの項目では、葛藤場面における価値葛藤や心理葛藤の場面を取り扱って主人公の行為・行動について考えることが多いが、Ｂの項目では他の登場人物の立場から考えるのも子どもたちの思考を深める有効な手段となるため、多角的な発問が大切になる。

　多面的・多角的な発問を扱っている山田教授の示範授業「バスと赤ちゃん」の中でも、ぐずる赤ん坊に困る母親の視点、母子を助けようとする運転手の視点、見守る乗客達の視点と見方を変える発問を行っていき、思考を揺さぶり子どもたちの対話を活性化させ、多面的にそれぞれの心情をとらえることができていた。

　幌向小学校で公開した授業、「スーパーモンスターカード」（内容項目 A-1　善悪の判断、自律、自由と責任）では、内容理解に迫るための基本発問を「どうしてぼくは、友人に何も言うことができなかったか。」から子どもたちの対話をスタートした。中心発問を「自分が大地の立場なら友人に言いますか？言いませんか？」とし、投影的な発問を設定した。

＜全体での対話の様子＞（「心の数直線」を用いて、「言えない」の割合の多い児童から教師側の意図的に対話をスタートしている）
（S1）「友情関係がくずれる。」
（S2）「言いたい気持ちはある。」
（S3）「また（何か）言われそうだから。」
（S4）（声をかけようか）なやんでいる。」
（S5）「自信がない。」
（S6）「友達だからこそ（声をかけたい）。」
（S7）「何が何でも盗みはいけないから言う。」
（S8）「もう一回同じするかもしれないから（言う）。」



　子どもたちの立場を明確にしてから対話をはじめた。それぞれの考え方の違いがあることを認め合い、それを受け入れることができていた。支持的な学級風土作りにおける道徳科の役割や重要性についてあらためて明確になった。

② 　展開後半における深化を図る発問（以下、深化発問）

▶ 展開後半における深化を図る発問（深化発問）
本時のねらいに自我関与させ、拡散した考えから納得解を見いだす発問、主体的な自覚を目指す。
納得解は、価値理解から人間・他者理解を経て（人間の弱さへの共感）、獲得できる。

　深化発問は、本時のねらいに自我関与させ、拡散した考えから納得解を見いだせるための発問、または、主に教材から離れて行う学習において、子どもたちからより深い考えを引き出すための発問となる。このとき、子どもたちが自分の生活経験と結び付けるなどして道徳的価値を主体的に自覚していくことが大切である。
　授業の展開後半において、子どもたちが本時のねらいとする価値に自我関与して考えさせるためには、展開前半の中心発問で拡散した考えに対して、立場や視点を変えたり、ずれを起こしたりするような補助発問を適宜行いながら子どもたちの発する言葉をつなげ、焦点化することによって議論を深めさせて、子どもたちの考えを収束させていく必要がある。特に子どもたちの既成概念を揺さぶり、実感のある議論を実現させることで道徳的価値の理解にとどまらず、人間理解・他者理解へと導き、それぞれの納得解へとつながるための必要な場面となる。

幌向小学校での公開授業では、「ぼくの『ごめんなさい』には、どんな想いが込められているのでしょうか。」を深化発問とした。どんな様子で「ごめんなさい」を言ったのかと補助発問から状況についての確認をしながら、何に対して謝ったのかを子どもたちの対話からまとめていった。児童に自我関与させながら考えさせることをねらいとした。

（S10）「ぼくと大地の分をあやまった。」
（S11）「カードをぬすもうとしたことに対して言った。」
（S12）「商品がバラバラになったから。」
（S13）「急に店員さんが来てとまどったから。」

また、「どうして大地はしょんぼりとしているのでしょうか。」と立場を変える補助発問から「ぼくはどんな声かけをしたらいいのだろうか。」とさらに、子どもたちの思考を促す深化発問を行った。

（S14）「悪いとわかっているならやめた方がいいよ。」
（S15）「二週間はすぐに終わるから、大丈夫だよ。」
（S16）「今度一緒に買いにいこうよ。」
（S13）「やっぱり万引きはよくないよ。」

発言を丁寧に問い返すことで、子どもたちの思考の深まり、価値理解・人間理解への焦点化を図ることができ、それぞれの納得解を導き出す姿が見られた。一方、教材本文から離れられないまま授業が終わったことから、実生活と結びつけて自分の生き方を見つめ直す部分では課題が残った。

（2）多様な感じ方や考え方に触れられる指導の工夫改善

① 事前アンケートについて

授業を行う際に、事前アンケートを行うようにしてきた。日常の道徳的な課題と教材の内容項目とを結びつけ、学習に対して主体的に関わることができることをねらいとしている。公開授業の中でも、自分と同じ考えの人がいるという安心感や、本時で話し合う課題の方向性を導き出すものとなっていた。振り返りの場面でも事前アンケートに立ち戻ることで、教材を通して得た価値理解・人間理解と普段の生活を結びつける手立てになるのではないかと考える。

事前アンケートの活用

まちがっているなと気がついても、見過ごしてしまった経験はありますか？	ある 17人 ない 4人
見過ごしてしまったのは、どんな時でしたか？	授業中、友達がふざけていた時 友達がけんかをしていた時 友達が下校中に雪玉を投げていた時 など
見過ごしてしまった時、どんな気持ちでしたか？	別に見過ごしてもふざけている人が悪いからいいよね。 少しモヤモヤしていた。 巻き込まれるのはいやだという気持ち。 注意すればよかったと後悔している。 など

② 事前読みについて

幌向小学校での公開研究会では、子どもたちが対話する時間の確保を目的としたことから事前読みを行い、本時の授業に臨んだ。授業前半の中であらすじを短時間で確認することができ、中心発問、深化発問に対しての思考・対話の時間の確保につながった。また、読み聞かせ等を行うことで小学校低学年でも短時間での内容の把握が可能であることも実証された。

課題としては、事前アンケートや事前読みを行うことで１単位時間を超えてしまうことが事後反省で出された。朝の時間や短学活などでの時間の確保が必要となる。

③　問い返しについて

子どもたちの発言を受け止め、次への一歩を導く発問が問い返しである。問い返すことでより明確な根拠を引き出すことが可能となる。問い返しの方法として、３つの視点を確認した。一つ目は問いを立てる場面などで思考を引き出し、語らせる場を作るための「話合いを進める」役割のあるもの。

二つ目は、視点をずらしたり、ジレンマを引き出したりなど「話合いを広げる」役割のあるもの。三つ目は、少数派や「共感しなかった場面」「道徳的な行為をしなかった場面」に着目して「話合いを深める」役割のあるもの。これらの問い返しを場面に応じて使い分け、一人の発言を全体に問い返すことで、考えが深まることがわかった。

（S１５）「店員さんが気づいていなかったかもしれないけど、商品をぬすもうとしたことにたいしてのごめんなさいだった。」
（　Ｔ　）「ちょっと気になるな。店員さん気づいていたのかな？近くの人と話して下さい。」
（S１６）「だってさ、落としたときにあわてていたよ。」
（S１７）「わざと気づいていないふりをしていた。」
（S１８）「見てて、買おうとしていたと思った。」

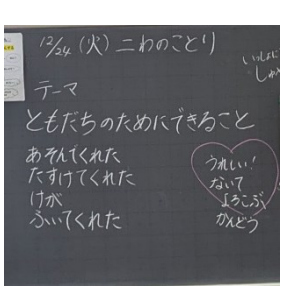
④　話し合いの工夫について

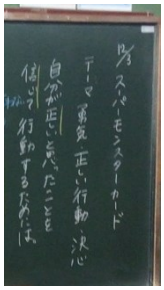
基本は対話がベースとなる。お互いの意見を尊重する学級風土の醸成が必要となり、相手の話しを聴く（傾聴）ことは重要なスキルとなり系統性をもった指導が必要となる。ペアでの話しは、横の人と話すことで緊張の緩和につながり、話し合いに深まりが見られた。

多くの考えに触れさせたい場面では、立ち歩いてペアを探し、お互いに話し合う活動も効果的だった。また、一斉指導時には、お互いに顔が見え、対話しやすい雰囲気が生まれるため「コの字型」の座席配置での指導が有効であった。ペアだけではなく、グループも作りやすいことから、子どもたちが主体的に活動しやすい場作りとなっていた。

⑤　問い・テーマ作り

本時では、テーマ設定という形で子どもたちの対話をスタートした。今日、どのようなことを考えていくかを子どもたち自らテーマとして作ることで、主体的に本時に関わろうとする様子が見られた。子どもたちからの問いを導き出し、導入で扱うことで内容項目への理解の深まりが感じられた。





⑥　役割演技

公開研究会の中で、場面や状況を設定し、役割を与えて演じさせる役割演技を取り入れた。登場人物の気持ちや考え方を実感し、相手の立場を理解する自我関与に大きく影響を与えることができた。

その後、山田教授の講義の中で、役割演技後に、観衆役となった児童の関わりをもたせることの大切さも説明していただいた。単なるショーで終わるのではなく、目的を持つこと、深い学びへ入るための「キーワード」をとらえ、学級全体で考えることの大切さを共有していくことも確認できた。教員の役割として、演者と観衆のパイプ役、演技の中断・論点整理・方向修正などファシリテーションの力も必要となる。

⑦　ＩＣＴの活用について

昨年度の授業報告書の通り、多面的・多角的に考えたり、自分自身との関わりの中で考えを深めたりするなど、場面に応じた活用を進めてきた。特に「心の数直線」は、山田教授の授業でも多く活用されている。子どもたちの思考を数値によって視覚化することが可能となるため、それぞれの考えを視覚的に捉えやすく、大きな効果をもたらしている。

反面、議論を深める上で、どのタイミングで用いることで効果があるかなど指導する上で考えていかなければならない。

「心の数直線」は、以下のアドレスや右図の二次元コードからアクセスすることができる。

http://www.kumamoto-kmm.ed.jp/kyouzai/web/Heart-meter3/

（３）自らの成長を実感できる評価の在り方

①　振り返りの意義

授業の終末段階で行う振り返りは、本時で得た子どもたちの納得解が表れるところであり、本時で扱った道徳的諸価値にどの程度自分事として迫ることができたかを捉える指標になる。同時に指導者側の評価として、発問が適切であったか、子どもたちの考えを広げ深める支援が効果的であったかなど、授業改善の視点を得ることができる。本時の中での自分の変容、または譲れない部分など見つめ直す事で、更なる思考の深まりが見られた。

本時で扱う道徳的諸価値に焦点化した授業展開を心がけ、タイムマネジメントに留意しながら、振り返りの時間を確保することが大切である。

②　振り返りの視点

公開授業の中では、テーマに出された「正しい行動」「信じて行動するためには」に立ち戻り、子どもたちはロイロノートでの提出を行った。テーマの視点に戻ることで、教材を離れ、日常と結びつけながら振り返るものが多く出された。価値理解とともに、人間理解・他者理解に踏み込むことができていることから、テーマを自分たちで設定し、その設定したテーマをもとに振り返ることには大きな価値があった。

また、協力校である第一小学校の授業では、振り返りの視点で①新しく知ったこと、これからしようと思うこと、②まだモヤモヤしていること（どうしたらいいか、こまっていること）、③友達の考えから、わかったこと、を視点で書くように提示した。普段からの積み重ねもあり、小学校１年生でも、友達との関わりから学んだことや今後どうしていきたいか書くことのできている児童がいた。継続して振り返りに取り組むことで、子どもたちに確かな力が身につくことが実証された。

また、山田教授が示範授業に用いたワークシートはどの授業でも同じであり、子どもたちにとって書きやすい形となっている。学年問わず年間通して同じワークシートを用いることで、子どもたちの安心感が生まれるのではないかという点も今後協議していく必要がある。

③　振り返りの実際

幌向小で公開した授業の児童の振り返りを紹介する。

- 僕も友達が悪いことをしているところをみても、もし友達がいなくなったらと思うと注意してあげられなかったからこれからは注意しようと思う。
- みんな盗むのに反対した意見も出していた。いろいろ大地にも複雑な気持ちがあった。
- 強い心を持って注意しないと相手にも伝わらないかもしれないし、注意もできない。だから、決心・強い心は大事だと今日の授業で感じられました。
- これを読んで、見過ごすのは良くないとわかった。これからはあまり見過ごさないように気をつけようと思った。もしこの物語のようにしている人がいたら勇気を持って言いにいこうと思った。決心は大切だとわかった。
- 「ぼくの心の弱さ」に共感できます。なぜなら自分も注意できないからです。

④　大くくりのまとまりを踏まえた評価について

大くくりのまとまりを踏まえた評価とは、道徳科の評価の在り方のひとつである。道徳科の評価は、個々の内容項目ごとに、その内容項目についてどのくらい理解したかということを評価するものではない。道徳的諸価値について多面的・多角的に考えることができるようになったか、道徳的諸価値を自分自身との関わりで深めようとしていたか、といったことを年間や学期といった一定の時間的なまとまりの中で評価するものである。今年度は理論研修を深め、部員間で共有した成果のあり方について次年度の実践の交流・検証へつなげたい。

（４）研究実践の検証

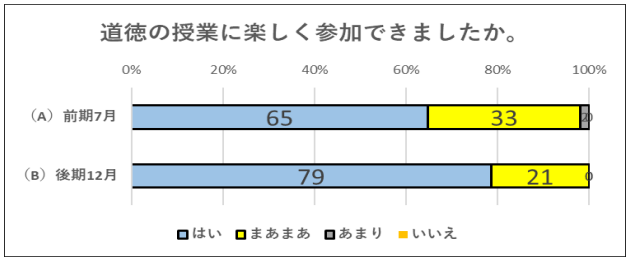
子どもたちの道徳に対する意識の変容を見るため７月と 12 月にアンケートを実施した。項目についても今年度の重点の焦点化を図るため昨年度から一部変更した。

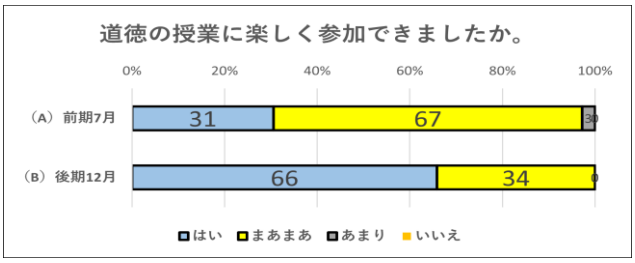
【アンケートの項目】

①道徳の授業に楽しく参加できましたか。
②道徳の授業で、自分のことや友達のことを考えることができましたか。
③道徳の授業で友達の考えをよく聞くことができましたか。
④道徳の授業中、たくさん考えることができましたか。
⑤道徳の授業で「なるほど」と思ったり、新しい考えに気づいたりしたことはありましたか。
⑥道徳の授業を通して考えたことが、自分の生活にいかされるようになってきたことがあると思いますか。

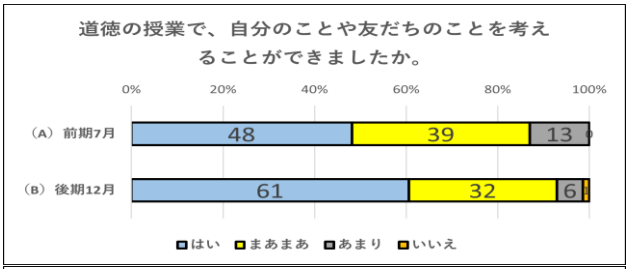
アンケート結果について（上段:7月、下段:12月）（左：幌向小学校中学年 71 名、右：豊中２年 41 名）

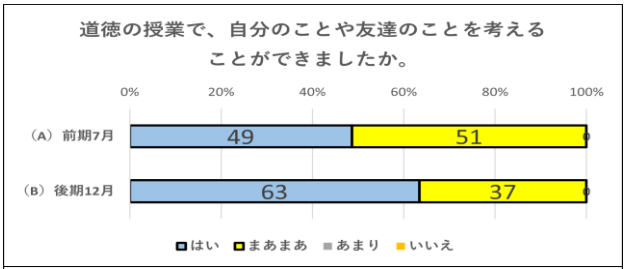
今年度の結果は、豊・幌向地区研修指定校最終年である、アンケート結果を次年度も課題考察を継続できるよう、小学校中学年と中学校２年生の各学校の中間学年を取り上げる。

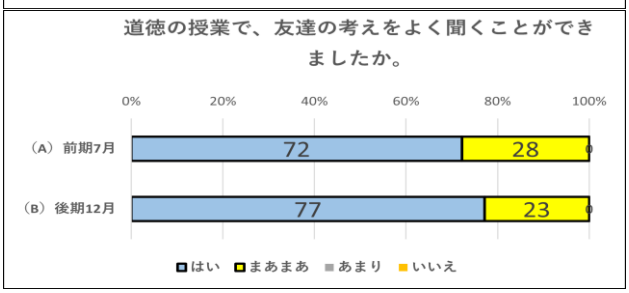


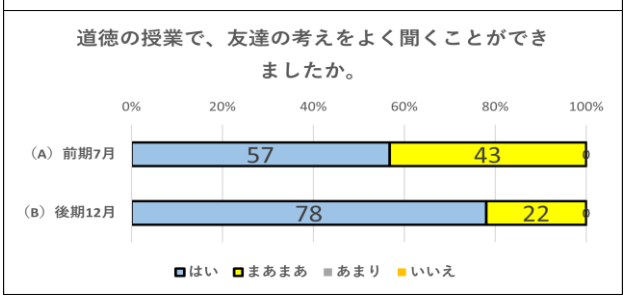


教師側が授業改善を図ることで、子どもたちは楽しく・意欲的に参加できるという変容が見られた。また、その土台として対話を通して気づき、考えることができる環境づくりができていることがわかる。

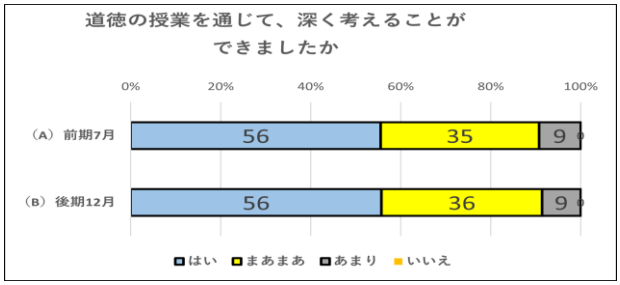


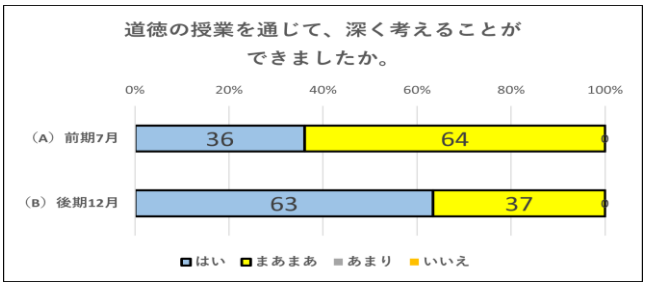


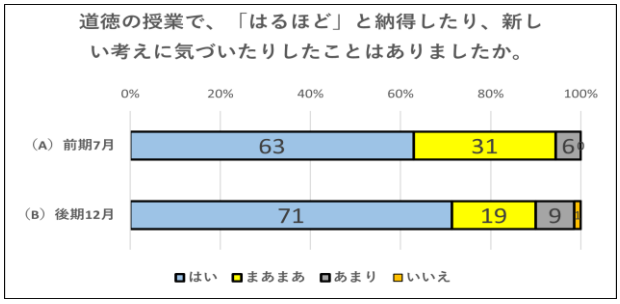


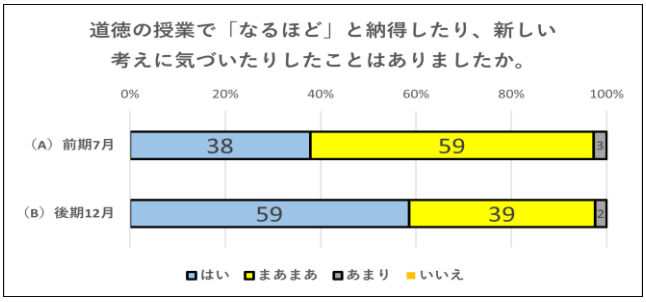


「対話」を育てる授業を展開していくことと支持的な学級風土作りを行っていくことで、子どもたちの授業に対する変容が見られた。特に、中学校で大きな変化が見られた。

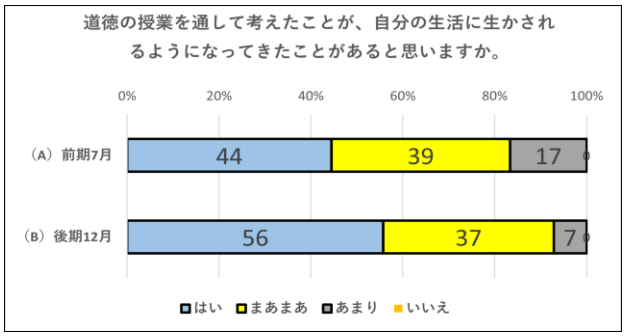


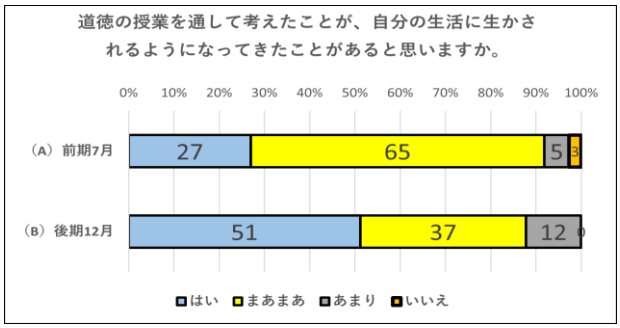






お互いに対話を重視し、議論を重ね自分を見つめていくことで、価値項目理解を超え、本時の中で納得解にたどり着くことができたか計る質問である。授業者が対話活動を意識し、それぞれの考え方を大切に受け止める授業を繰り返すことで、大きな改善が見られた。ただ、「納得する」という部分の理解が、学年が下がるほど難しいようだった。価値理解と人間理解を両天秤にした、授業改善が今後も必要である。





最後の質問項目は、どの学年・学校でも数値の低いものとなっていた。これは、授業と日常が乖離している状況を示していると押さえている。先にも触れたが、事前アンケートや問い作り、振り返りの視点など教材の内容項目と普段の自分たちの置かれている環境・人間関係と重ねていくことで、改善を図ることができるのではないかと仮定できる。今後も、研究をすすめていく必要性がある。

６　研究主体校・協力校との連動

（１）具体的な活動

幌向小学校では、「スーパーモンスターカード」（内容項目 A-1　善悪の判断、自律、自由と責任）を題材に公開研究会を行うにあたり、部会をはじめ協力校から多くの助言をいただいた。本校の研修では、これを参考にしながら指導案検討を進めてきた。

連携校の豊中学校とは、７月の公開プレ研修（２年「お月様とコロ」内容項目 A-２　正直、誠実）においての意見交流や、公開研究会にむけての指導案検討、10 月には、京都芸術大学附属高等学校校長鈴木克治氏、愛知県犬山市立犬山中学校増田千晴氏をお招きし、示範授業を行っていただき、共に研修を深めることができた。

協力校の清園中学校には、６月山田教授の示範授業、再現授業、講演への部会員全員での参加をお願いし、今年度の方針と一般化していく指導内容を話し合う機会をいただいた。

（２）公開研究会について

今年度の公開研究会は 12 月の１回、プレ研究会を７月に１回、授業力向上をねらいとした示範授業を 10 月に１回行った。プレ研究会の中では、対話を重視した学級風土作り、発問を短くして子どもたちの対話をつなげていくファシリテーション力が必要であることが確認できた。

授業力向上をねらった示範授業では、小学校４年生、中学校２年生へ増田千晴氏の「先輩達が残してくれたキンメを残す」（A-３　節度・節制）を行っていただいた。「現代的課題　SDGｓを道徳科から考える」をテーマとし、子どもたちの日常に根ざした教材作りや、子どもたちの立場を視覚的に残す手立てなど多くの学びを与えていただいた。

12 月３日には、幌向小学校を会場として公開研究会を行った。当日、講師の山田教授には豊中学校２年生、幌向小学校５年生、６年生を対象とした示範授業、特設授業に対する助言、参加者を対象とした「うれしい！楽しい！道徳大好き～「考え、議論する道徳」への転換～」と題するご講義をいただいた。「人間の弱さを感じ、人間理解・他者理解を深めることが大切である。きれい事の授業から脱却、サイレントマジョリティーを作らない授業を目指してほしい。」という激励と共に、多面的・多角的な考えを促す発問作りや、役割演技の効果的な活用方法など幅広く説明いただき、明日からの授業改善に生きる講義となった。

７　成果と課題

（１）成　果

〇対話を活発にそして安心してできる学級風土作りが必要である。全ては毎時間の積み重ねである。また、市で力を入れているピア・サポートの考えの積極的な活用が期待される。

〇子どもたちの対話を促すための適切な発問（中心・深化）について一般化し、教材に合わせた発問の形態を理解することで、対話の質の向上につながった。

（２）課　題

●教材本文からどのタイミングで離れ、内容項目や人間理解を深めていくかをマネジメントすることが大切である。子どもたちの日常と結びつけることで、より道徳的価値を促すことができる。

●事前アンケートや事前読みなど、効果は確認できた。一方で振り返りまでの１単位時間の作り方を工夫する必要性がある。

●振り返りを生かした評価方法をより一層検討する必要がある。子どもたちの道徳的な成長を捉え、道徳的な実践意欲と態度を育てる手立てとなる方法を見いだしていく必要性がある。

８　担　当

部長：端﨑　元気（幌向小学校）

部員：米澤　輝彦（豊　中学校）　坂下　邦子（志文小学校）

多田　彩乃（第一小学校）　峯田　久美（北真小学校）

茂泉　繁明（清園中学校）

「外国語」 研究部会

1　部会テーマ

外国や外国語への関心をもち、積極的に英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする、**「英語が使える岩見沢の子ども」**の育成

2　研究目的

（１）外国語活動および外国語科における指導方法の工夫・改善
（２）**主体的に**外国語を学ぶ子どもの育成
（小３～中３までの「学びの連続性や系統性」の整理・明確化を通して）
（３）外国語活動および外国語科における**小中の連携・接続**の充実

3　テーマを具現化するための研究の視点

（１） 小３～中３までの「学びの連続性や系統性」の整理・明確化
（２）相手意識や目的意識をもった、「必然性のある言語活動」の在り方
（３）「理解と表現」の充実をめざす ICT の活用

4　研究年次

令和６年度～令和７年度（２年研究の１年次）

5　研究実践の具体

（１）視点１　小３～中３までの「学びの連続性や系統性」の整理・明確化
〇小学第３学年から中学第３学年までの各段階における到達ゴールや定着リスト（学びの地図）の作成とそれを生かした授業の構築

学びの地図（小学生版）の一部

3～6年生までの「学びの地図」

※学校や家で、たっぷり練習して定着させよう！
※わからない部分や不十分だと感じる部分は、今の学年に関係なく、前に戻ったり、場合によっては先に進んだり…**自分の「現在地点」**に合わせて学習しよう！

3年生	（聞く）英語を聞いて、それらを表すイラストや写真などと結びつけることができる （読む）アルファベット大文字を読めるようになる （話すやりとり）・簡単なあいさつを交わしたり、感謝の気持ちを伝えたり、先生からの簡単な英語の指示に応じたりすることができる　・自分や相手の好みについて簡単な質問をしたり答えたりする （話す発表）自分の好き嫌いについて、簡単な英語で話すことができる （書く）アルファベット大文字をほとんど書くことができる
4年生	（聞く）ゆっくりはっきり話された際に、身近なもの・ことに関する基本的な英語の意味がわかる （読む）アルファベット小文字を読めるようになる （話すやりとり）自分や相手のことについて、簡単な英語で質問したり答えたりする。 （話す発表）身の周りのものや自分について、人前で実物や画像などを見せながら、簡単な英語で話すことができる （書く）アルファベット大文字と小文字をほとんど書くことができる

5年生

・授業の最後は個別で練習！　iPad＆個人イヤホンを活用しよう！　・聞く＆話す練習を何度もくり返し行い、自分のものにしよう！

	Lesson1	Lesson2	Lesson3	Lesson4	Lesson5
パフォーマンスゴール	あなたのことを友達に知ってもらおう Nice to meet you./ I'm~./ Please call me~./ My name is ~./ Do you like~? /I like~./ What ~ do you like?/I have~.	クラスの誕生日カレンダーをつくろう When is your birthday?/ My birthday is ～./ What do you want for your birthday?/ I want ～	夢の時間割をつくろう What do you have on (曜日)? /I have (教科) on (曜日)./I study (教科) with (人物)./What day is it?/Good idea	自由な１日があったら何をしたいか伝えよう What time is it in (地名)?/ It's ～o'clock./ What time do you ～?/I ～ at (時間)./ I (ひん度) (すること)./ What do you do in the morning [afternoon]?・/I (すること) in the ～	クラスの I can ～/ ～./ Wha
定着リスト	【聞くこと】 □色　□スポーツ □動物　□野菜 □果物　□食べ物 □デザート の英語を聞いて意味が分かる 【話すこと】 □名前や好きなことを聞いたり答えたりできる 【アルファベット】 □アルファベットを聞いて、どの文字かがわかり、読むことができる	【聞くこと】 □月 □数字（～３１） □日付（序数） □身の回りのこと の英語を聞いて意味が分かる 【話すこと】 □誕生日や、誕生日に欲しいものを聞いたり答えたりできる 【アルファベット】 □アルファベットの大文字のなぞり書きができる	【聞くこと】 □教科 □曜日 の英語を聞いて意味が分かる 【話すこと】 □時間割や教科について、聞いたり答えたりできる 【アルファベット】 □アルファベットの小文字のなぞり書きができる 【S&L】 □ｂとｐの音を聞き分ける・正しく発音する	【聞くこと】 □日課　□習慣 □ひん度 の英語を聞いて意味が分かる 【話すこと】 □いつ、何を、どのくらいするのか、聞いたり答えたりできる 【S&L】 □ｆとｖの音を聞き分ける・正しく発音する	【聞くこ □できる □副詞 の英語を 【話すこ □できる 【S&L】 □ｓとｚ
定着チェック方法	【聞くこと】 MWBIP108～)のORコードを読み取る→再生（上記リストにあるもの）→意味が分かればOK	【聞くこと】 □イロ音声データ「月」「数字～３１」「序数」を再生 →音声のみを聞いて、意味が分かればOK	【聞くこと】 □イロ音声データ「教科」「曜日」を再生 →音声のみを聞いて、意味が分かればOK	【聞くこと】 □イロ音声データ「日課」「習慣」「頻度」を再生 →音声のみを聞いて、意味が分かればOK	【聞くこ □イロ音 →音声の

小学校外国語活動・外国語科と中学校外国語科の連携には、指導方法の一貫性や教員の専門性、評価方法の違い、連携のための時間の確保、児童のモチベーションの維持などの課題が指摘されている。

本研究においては、これらの課題解決のため、小・中学校の教員の連携の下、小学第３学年から中学第３学年の学習内容について、各単元で定着しなければならない事項を「学年の到達ゴール」として児童生徒に示すことで小学校教員には各段階での指導事項を明確にした指導を意識させるとともに、児童生徒の学習への見通しや予習、復習といった主体的な学習へとつながるものとなるよう作成し、研究実践を行った。

（２）視点２　相手意識や目的意識をもった、「必然性のある言語活動」の在り方

〇各単元末でのパフォーマンス課題（即興的な会話、スピーチ、プレゼン）の設定

本研究では、「英語が使える」ということを「即興的な会話ができること」「スピーチなどができること」に焦点化し、日常的に外国語を使ったコミュニケーションができるよう「場面を設定したロールプレイ」「英語でペアワークやグループディスカッション」「ALT 交流」「プロジェクト的な学習によるスピーチ」など、必然性のある言語活動を設定し、目的意識や相手意識を伴ったコミュニケーションを図ることとした。

（３）視点３　「理解と表現」の充実をめざす ICT の活用

〇ICT の効果的な活用による指導内容・指導方法の充実

児童生徒が主体性をもって学習するために ICT の活用は重要である。

特に授業においては、指導事項をスライドにしたり、言語活動を音声化したりするなど、児童生徒が自ら学べるよう工夫している。

また、プロジェクト的な学習の際にはスピーチする内容をインターネットで収集するなど、児童生徒の「理解と表現」が充実するよう取り組みを進めた。

６　研究主体校・協力校における連動

（１）　研究授業（協力校）

研究協力校である栗沢中学校において、主に研究の視点にかかわり研究授業を実施した。

栗沢中学校は、栗沢小学校との小中一貫教育の取組を進めており、特に、外国語科においては、中学校教諭による小学校への乗り入れ授業を実施し、指導の一貫性を図っている。

また、校内研究も小中で共有されていて、特に、児童生徒の学ぶ内容、学ぶ過程を具体化した「ラーニング・マウンテン」を取り入れ、児童生徒の見通しをもったより主体的な学びを研究している。

ア　研究授業　栗沢中学校（９月１０日（火））　・学年　第１学年（15 名）
・授業者　教諭　西藤　秀美

【単元】Lesson4 Our Summer Stories
～Write about your summer Vacation　！
（教育出版　ONE　WORLD①）

〇ねらい：夏の思い出や出来事をスピーチすることを通して動詞の過去形について知り実際に英会話で使えるようにする

○研究授業のポイント
①ラーニング・マウンテンを使った見通しをもった必然性のある言語活動の実施
②ICT を活用した写真や動画を使った表現の工夫・充実
③「個別発展タイム」を位置づけ、個々の学びの充実・深化を図る取組

イ　研究授業から学ぶこと

①　ラーニング・マウンテンの活用
・生徒の学習に対する見通しと本時の学習内容・活動の明確化
・英語を使う必然性のある言語活動の実施と生徒の自覚
・正しい英語ではなくても、伝えたいという気持ちが伝わる積極的な言語活動の実現

②　ICT の活用
・動画・音声等の繰り返しによる基本文型の定着
・伝える内容の「見える化」による表現への意欲と方法の充実
・個々の学習を支えるツールの充実と授業のテンポを高める
③　「個別学習の時間」の設定
・本時の定着に活用する生徒、新たな単語について調べる生徒、前時までの学習内容の確認に使う生徒等、各自の判断による主体的な学習の展開

以上のような成果が見られ、指定校の実践へ生かすことと、再現検証へと繋がった。

（２）公開研究会（研究主体校）
本研究部会の指定校である北村小学校、北村中学校を会場に両校の公開研究会が開催された。
両校は小中一貫で子どもたちを育てることを重点に「９年間を見通した”自立した学習者”を育てる授業の創造」を研究主題に、外国語科の授業を通して研究の成果を発表した。
本授業においては、特に、小中で指導過程を統一して、外国語科の小３から中３までの、「聞く・読む・話す（やり取り、発表）・書く」の積み重ねを意識したゴール一覧が作成され、そこをめざし日々の授業が積み上げられている

ア　北村小学校（１１月１２日（火））
・学年　第６学年（１７名）
・授業者　教諭　宮本　将輝
ＡＬＴ　James Retting
【単元】Unit6　Save the animals
（東京書籍　NEW HORIZON Elementary⑥）

○ねらい：生き物への理解を深めるために、生き物が暮らす場所や直面する問題、生き物のためにできることについて、聞き取ったり伝えたりすることができる 。また、それらについて、例文を読んだり、例文を参考に書いたりすることができる。

Unit6　Save the animals.	
単元目標	①生き物が暮らす場所や、その生き物が直面する問題、その生き物のためにできることなどについて、聞き取ったり伝えたりすることができる。 ②それらについて例文を読んだり、例文を参考に書いたりすることができる。
ゴール活動	「飼いたい生き物」について、画像を見せながら、原稿なしで、自分ができることなどについて、スピーチをして伝える。
1	学習の見通しをもつ New words:「動物」・「海の生き物」・「鳥」
2	生き物が暮らす場所を聞き取る・伝える New words:「自然」
3	生き物が直面する問題を聞き取る・伝える New words:「生き物の問題・できること①」
4	生き物のためにできることを聞き取る・伝える New words:「生き物の問題・できること②」※別紙
5	スピーチ準備
6	スピーチ発表！
7	Over the horizon ～世界の生き物がかかえる問題などについて考えよう～
8	単元テスト
<私なりの目標>	<目標達成できたかな?>

○研究授業から
①　単元や本時の学習内容の見通し

・単元の導入時に、学習の目標やゴール、学習計画を児童と共有していた
・各時間に学んだことを使い、その時間内に話す内容を１センテンスずつ構築し、積み重ねていけるようにした
・言語活動に必然性や相手意識をもたせた

② ICT の活用

・前半で ICT（スライド資料）を活用してテンポよく進め、後半での児童のアウトプットの時間や思考する時間を確保した

③ 「個別学習の時間」の設定

・個別最適に学ぶ機会の確保として、「学びの地図」を参照して復習や予習に取り組んだり、アルファベットの練習プリントに自ら取り組んだりする児童の姿が見られた

イ　北村中学校（１１月１２日（火））	・学年　第３学年（１０名） ・授業者　教諭　髙嶋　裕美子 ＡＬＴ　James Retting
【単元】Lesson5　Being True to Ourselves ～Give advice to your friends! （教育出版　ONE　WORLD③）	

〇ねらい：「もしも自分が～だったら」について、 伝えたいことを整理し相手に興味を持って聞いてもらえる工夫をして、 自分の願望や提案を相手に伝えるために、簡単な語句や文を用いて１分間のスピーチができる。

〇研究授業から

① トピックスに基づく即興的な英会話

・１ 分間で何語程度の英語を発話できたかをカウントし、目標を「見える化」した

・生徒の意欲や目標意識が喚起された

② 身につけた学習スキルを活用

・スピーチ活動の前に「考えること」と「すること」や、「挑戦すること」と「すること」、のように、スライド資料で明示することによって、生徒の活動の様子に迷いがなく、主体的な姿を引き出していた

・マッピングメモを用いてスピーチの内容を考えた後、ペアでスピーチの練習をするなど表現内容を広げていた

③ 目的意識や相手意識を伴ったコミュニケーションの充実

・話し手は、話そうとする内容のキーワードをもとに相手を見て、身振り等を交えながらスピーチし、聞き手は、相槌・聞き返し・質問するなど、自分の思いや考えをもとにコミュニケーションするなど、生徒たちの「英語を使おうとする姿勢」が強く表れていた

小中の授業からは、小学校から中学校への成長を感じさせるとともに、子どもたちの学習スキルを高め、自ら学ぶ姿勢を育てていることが感じられた。

そして、なにより「英語が使える岩見沢の子ども」をめざし、積極的に学んだことを生かしながら英語でコミュニケーションを取ろうとする子どもたちの姿がみられたことは大きな成果であった。

７　成果と課題

（１）成　果

小３～中３までの各段階における到達ゴールや定着リスト「学びの地図」を作成することで、児童生徒も、そして授業者自身も、各単元のゴールと年間の見通しをもって授業に臨むことができるようになったことが、今年度の大きな成果のひとつである。また、具体的に何を、どうすればよいか、どう定着したことをチェックすればよいか、なども併せて明記することで、それらが学習の道しるべとなり、自走した学習（あるいは主体的な家庭学習）を実現する（指導する）ための大きな手立てとなった。

また、授業終盤に学習を委ねる「個別学習」の時間を設けた実践を積み重ねることで、児童生徒の学習意欲や主体性の高まりが見られた。そして、その時間を設けるための「授業前半部

分のスリム化」を、ICT の効果的な活用によって実現させ、児童生徒にとっても、シンプルで分かりやすい単元構成を考える一助にもなった。

小学校のアンケート結果で、全ての項目で肯定的回答の割合が増加したことは、パフォーマンス課題を適切に設け、各単元で目的意識や相手意識をもった言語活動が展開されたことに加え、こうして「学習を委ねる」過程にある様々な手立てや意識の変容の成果であると考えられる。

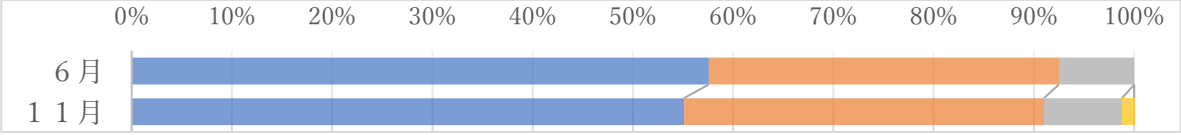
中学校のアンケート結果では、「スピーチ・プレゼン課題における工夫」に関する項目での肯定的回答の割合が増加している傾向にあった。単元末のパフォーマンス課題を、単元導入時に明確に提示し、ゴールを意識した授業展開が積み重ねられた成果であると考えられる。

（2）課　題

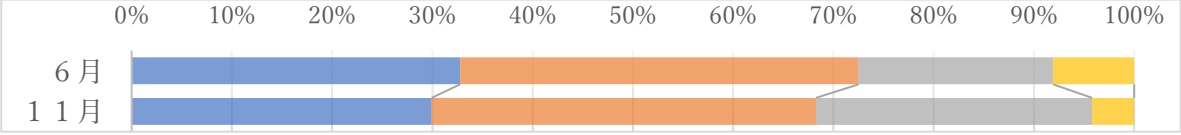
中学生を対象としたアンケートの以下３項目については、肯定的ポイントが下落していた。

【中学校】　…できる　…少しならできる　…あまりできない　…できない

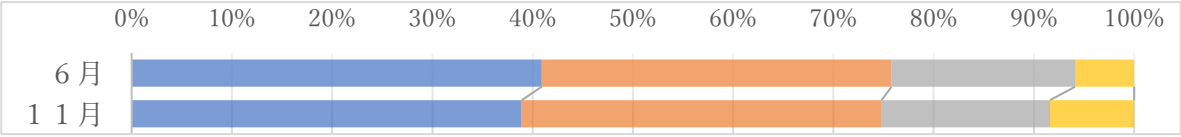
①安心するコミュニケーションを心がけていますか？（アイコンタクト、表情、内容、興味や楽しさ、深さ、広がり）



②英語で会話することについて、「合っているかの不安」より「使ってみて楽しい」と思いますか？



③もっと英会話がしたいと思いますか？



主として「即興的な英会話」についての項目である。①については、学級経営や人間関係上の課題との相関性も考えられる。常にエラーを伴う英会話であっても安心して行える「相手との関係性」を構築していくことに対しても、外国語の授業者として注力していくべきであるという示唆として解釈したい。岩見沢市の推進するピア・サポートの機能を、外国語の授業においても取り入れ、英会話を行う上での「安心・安全なトライ＆エラーの環境づくり」を行っていく必要があるだろう。

②については、即興的な英会話の中であっても、正解を求めようとする意識や、正確に話さなければならないという意識が根強く残っているのではないかと考えられる。栗沢中１年生、北村中３年生の授業の様子を参観すると、生徒は即興的に英語を話すことに意欲的で、文法的に整った英語ではなくても「相手に伝えたいことを英語で何とか伝えること」を楽しんでいる様子が多く見られたがゆえに、このアンケート結果は少し意外であった。スピーチやプレゼンなどのパフォーマンスとは異なり、多少の文法的なエラーや語彙の誤りは割り引いて、相手に伝える・伝わることを最たる目的とする、という意識を繰り返し指導し、様々な場面を通じてポジティブな経験値を日々積み重ねていく必要があるのではないだろうか。

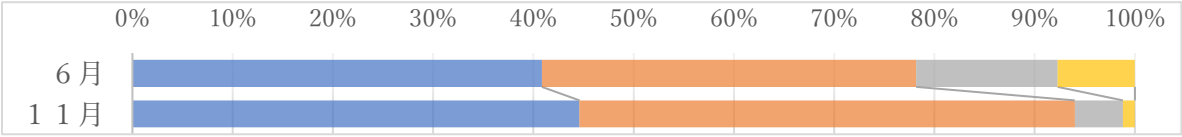
８　担　当

部長：宮本　将輝（北村小学校）
部員：石川　亜紀（栗沢小学校）　竹田　吉子（美園小学校）
　　西藤　秀美（栗沢中学校）　髙嶋裕美子（北村中学校）　大滝　千夏（明成中学校）

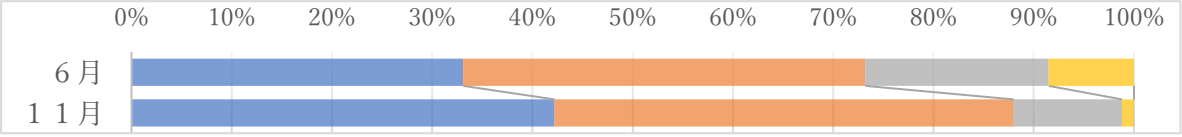
９　資　料（児童生徒用アンケート）

【小学校】　…できる　…少しならできる　…あまりできない　…できない

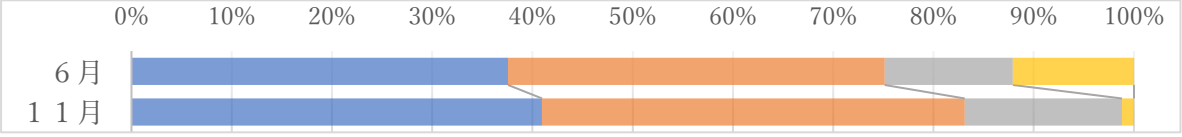
●相手の目を見て英語を話すことができますか。



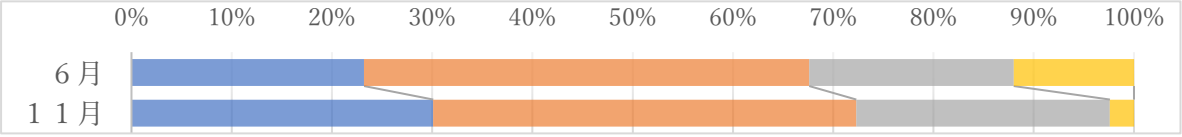
●相手の言ったことに対して、何かしらのリアクションが英語でできますか。



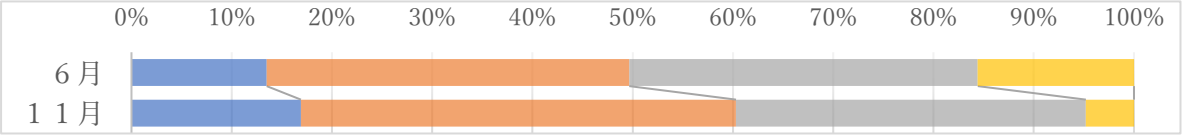
●明るい声、明るい表情で話すことができますか。



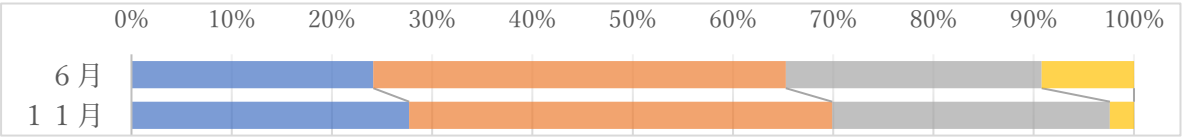
●英語らしい発音で、英語を話すことができますか。



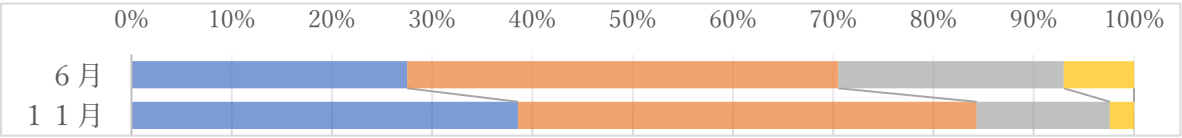
●英語で話している時、相手が言ったことに対して、英語でさらに質問することができますか。



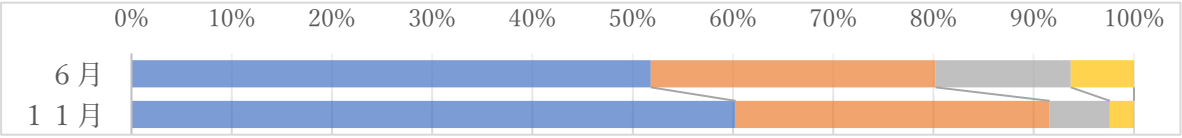
●聞き取れなかった時に相手に英語で聞き返したり、どういう意味か聞いたりできますか。



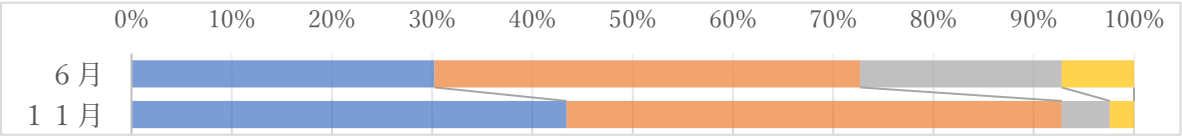
●伝えたいことを、シンプルな英語の表現で伝えることができますか。



●単元のゴールを意識して、毎時間の英語表現を覚えようとしていますか。

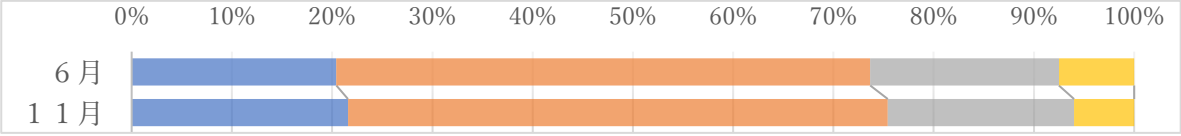


●これまでに習った英語の表現を、使えそうな場面がきた時に使うことができますか。

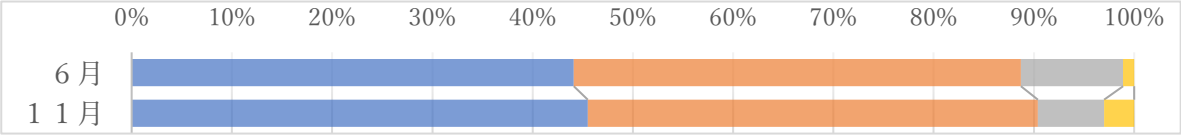


【中学校】　…できる　…少しならできる　…あまりできない　…できない

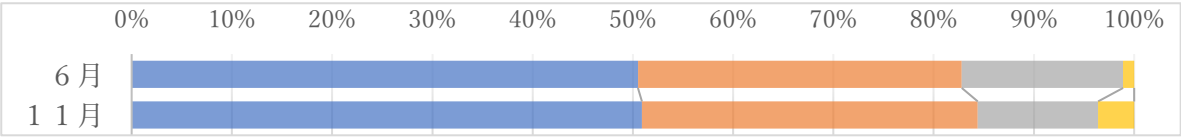
●頭に思いつく内容を、自分の知っている英語で話したり、別の言い方で簡単にして話したりできますか？



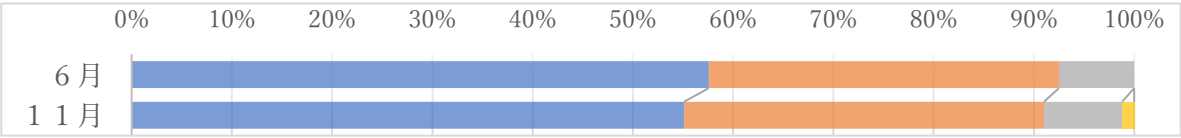
●伝えることや質問に偏りがでないような「会話のキャッチボール」を心がけていますか？



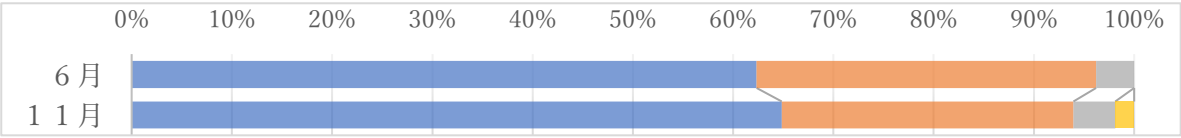
●迷っても、間違いを恐れずに、とにかく伝えようとしていますか？



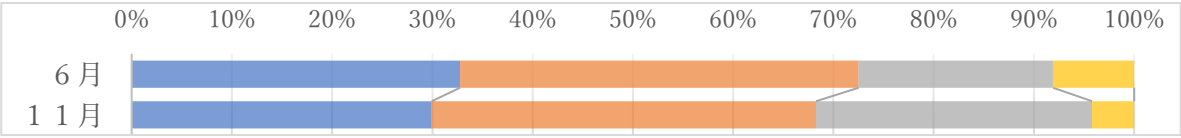
▲安心するコミュニケーションを心がけていますか？（アイコンタクト、表情、内容、興味や楽しさ、深さ、広がり）



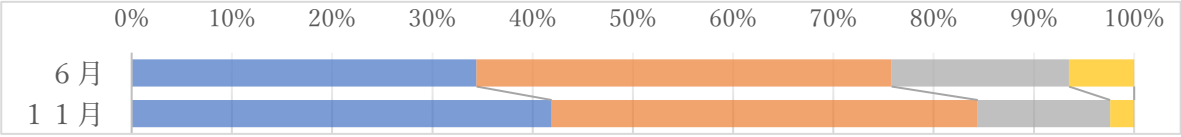
●話題を作る、話題を広げる、相手の話にはリアクションや相づちをする、を心がけていますか？



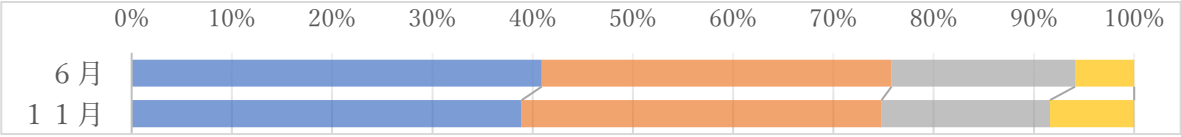
▲英語で会話することについて、「合っているかの不安」より「使ってみて楽しい」と思いますか？



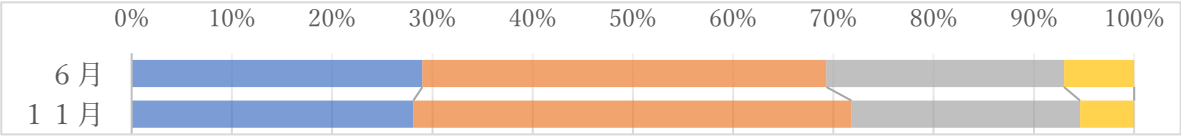
●英語で会話すると、自信がつきますか？



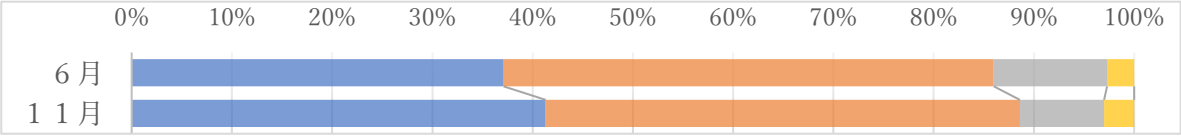
▲もっと英会話がしたいと思いますか？



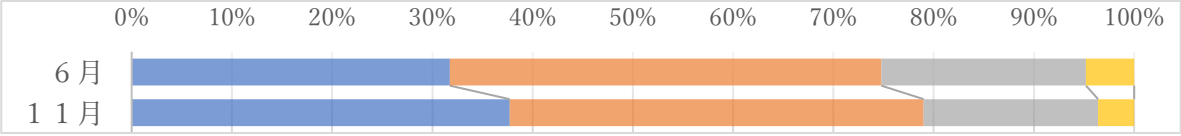
●ネットで調べた長い文章情報の中から、大事なポイントを短く絞り、聞き手も自分もわかりやすい簡単な英語を選択、表現することができますか？



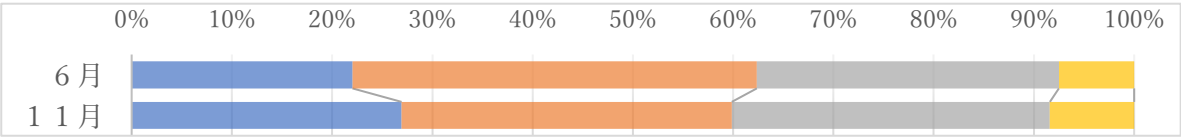
●聞き手を意識して、内容を簡潔にした伝え方を工夫してますか？



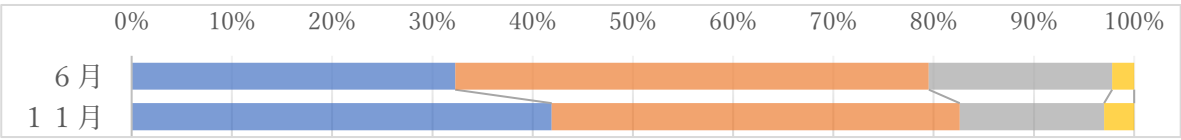
●文を読むのではなく、絵や写真、文字をヒントにして、英語で説明や表現をすることができますか？



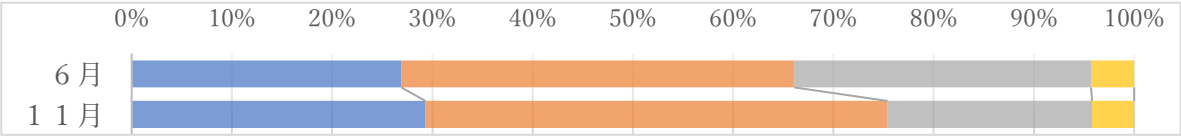
●プレゼンやスピーチの中に、聞き手参加の場面を入れることができますか？



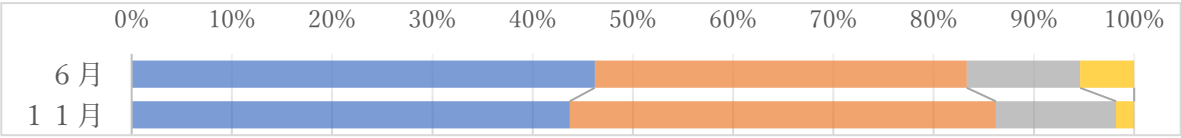
●短いプレゼンキーワードメモを手元に置いたとしても、目線は聞き手を見る方を多くして、話すようにしていますか？



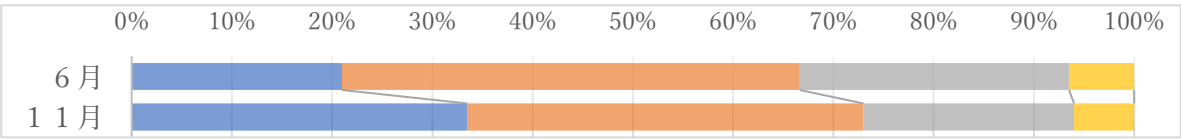
●出だし→順序→内容→一部聞き手参加型→シメ、のように、一連の流れを工夫していますか？



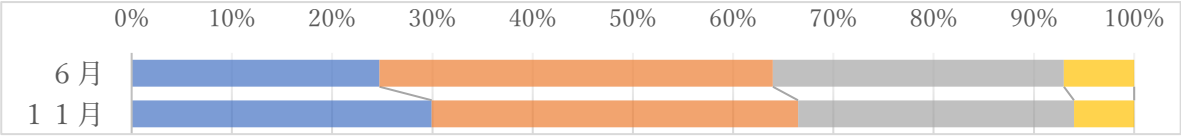
●声の大きさ、聞きやすい間、強調部分、アイコンタクト、話す順序など、聞き手がワクワクし、わかりやすく、より興味を持つようなコミュニケーションの工夫を心がけていますか？



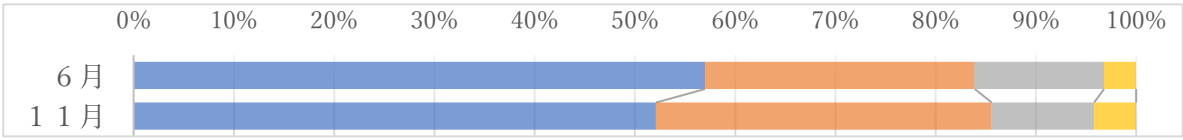
●絵、写真、少ない文字、キーワードメモをヒントにプレゼンやスピーチをすることに、自信がついてきましたか？



●絵、写真、少ない文字、キーワードメモをヒントに、次に工夫したいことが思いついていますか？



●自分のプレゼンを相手が真剣に聞いていて、「伝わった」と思えたのがうれしい、と思えたことはありますか？



「情報教育」 研究部会

1　部会テーマ

「ICT を効果的に活用し学びを広げ深める岩見沢の子どもの育成」

2　研究目的

（１）個々の学びの実現に向けた有効な ICT の活用方法を明らかにする
（２）情報活用能力を育むための学習活動のあり方を研究提案する
（３） ICT を活用し、学校現場における校務を軽減する

3　テーマを具現化するための研究の視点

（１）ICT 活用による授業改善及び業務改善
（２）生成 AI 等を活用した学習活動の在り方について検証
（３）基礎学力の定着を目指した AI ドリル等の活用

4　研究年次

令和６年度～令和７年度（２年研究の１年次）

5　研究実践の具体

（１） 児童生徒の情報活用能力育成に向けた実態調査と育成に向けた取組

① 小中学生向け情報活用能力診断ツール「ジョーカツ」の活用

小学生から中学生の情報活用能力を診断するツール「ジョーカツ」（一般社団法人国際エデュテイメント協会）を活用し、情報教育部会の５つの小中学校で情報活用能力の診断を行い、児童生徒の情報活用能力の実態調査を行なった。

- 参加校と対象学年および人数
- 参加校：岩見沢小学校、第二小学校、メープル小学校、上幌向中学校、緑中学校
- 対象学年：小学４年生から中学３年生
- 参加人数:：合計 320 名

情報活用能力の診断については、全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙の中に情報活用能力についての質問があるが、情報活用能力に特化したものではなかった。「ジョーカツ」による情報活用能力の診断はタブレット上で質問に答えていくことで「基本操作」、「問題解決・探究」、「情報モラル・セキュリティ」の３つの能力が診断される。

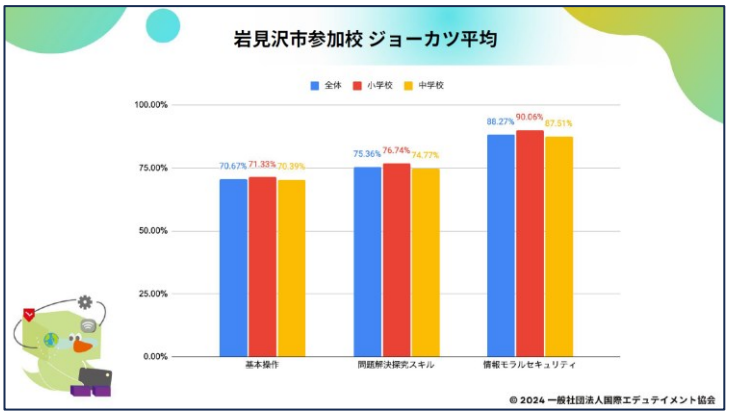
② 「ジョーカツ」診断結果

ア　参加校による診断結果

各校の情報活用能力の診断結果から、「基本操作」、「問題解決・探究」、「情報モラル・セキュリティ」３つのスキルはどの学校も概ね良い結果になった。「問題解決・探究スキル」については、診断前から課題と認識していた「整理・分析」の能力が低いことが分かった。

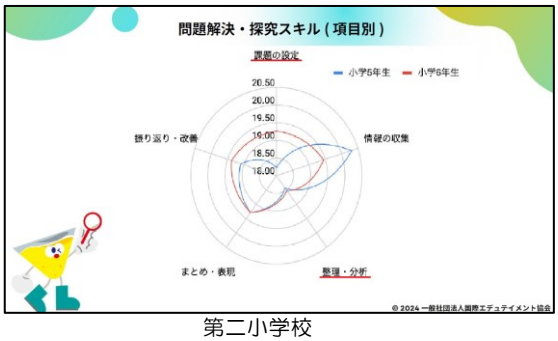
「課題解決や目的を意識しながら情報の特徴や傾向、変化を見つけることができますか？」という質問に対しては全体的にスコアが低い。この質問については、児童・生徒が問題を解決するために情報を分析する能力を測定しているが、理解が不

足していることが示唆される。また、「自分が調べたい課題の目的をはっきりさせ、適切なグラフや表を用いて情報を整理することができますか？」という質問についてもスコアが低い傾向にある。この質問については、目的を設定し、データを整理する力を評価しているが、多くの児童・生徒が困難を感じていることが分かる。

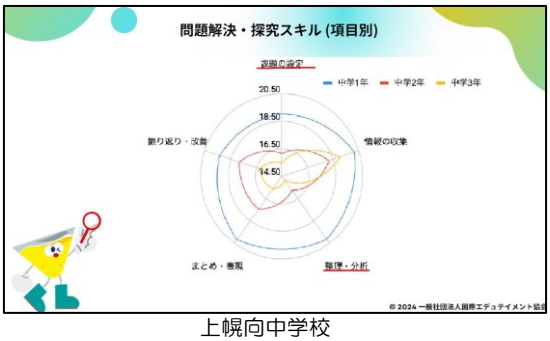


イ　研究主体校である第二小学校と上幌向中学校の結果

両校の結果からは、「課題設定」と「整理・分析」の能力がどちらも低くなっており、小中が連携して情報活用能力を育成していく必要があることが示唆されている。



第二小学校



上幌向中学校

これらの結果は岩見沢市内の学校における情報リテラシー教育の現状を反映しており、特に問題解決スキルの向上が求められていると考えられる。

また、情報モラルやセキュリティに関する教育も強化することでより安全な情報利用ができるようになると考える

（２）生成 AI 等を効果的に活用した学習活動の提案

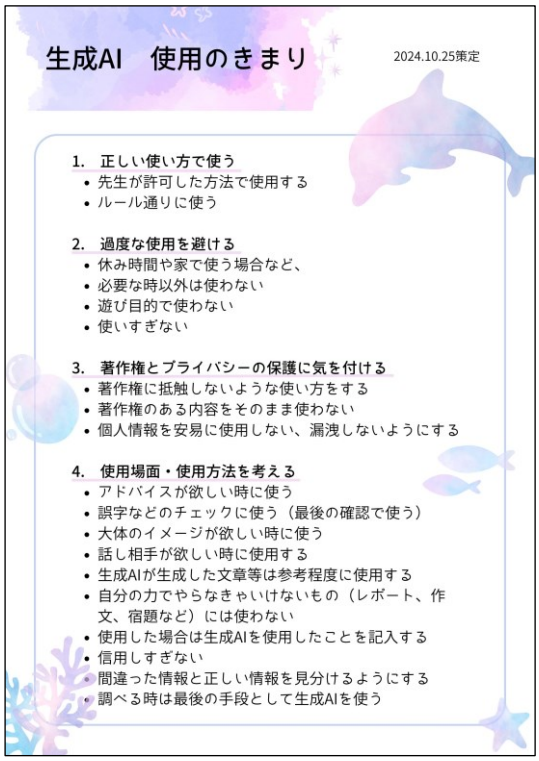
生成 AI 等を活用した学習活動の在り方については、文部科学省より「初等中等教育段階における生成 AI の利用に関する暫定的なガイドライン（令和５年７月４日公表）」が公表されており、そこには生成 AI の活用ステージが示され、生成 AI を学びに活かす力を段階的に高めていくことが考えられている。研究主体校である第二小学校と上幌向中学校では、生成 AI 自体を学ぶ活動を出発点とし、教師とともに生成 AI の使い方について学ぶ活動を行った。また、子どもたち自身が生成 AI を活用するためのルールを策定することで、生成 AI の可能性とその限界について、子どもたち自身が考えながら活用していけるのではないかと考えた。子どもたちの「主体的・対話的で深い学び」を実現するには、どのように生成 AI を活用することができるのか、検証を進めた。

※子どもたちが使用する学習端末はフィルタリングにより、生成 AI の使用制限がかかっている。本研究は岩見沢市教育研究所の研究事業として、生成 AI を活用した学習活動について検証を行うため、岩見沢市教育委員会と連携し、同意書の作成やフィルタリングの一時的な解除等の特別な措置を講じて実施したものである。

①　「生成 AI 自体を学ぶ段階」から「使い方を学ぶ段階」

研究主体校である第二小学校と上幌向中学校では、生成 AI に関する新聞記事を

活用して学習を進めた。生成 AI の仕組みについて学習し、インターネットで生成 AI のメリット・デメリットについても調べる活動を行なった。また、教師が実際に生成 AI を使用する場面を見せることで、生成 AI の可能性とその限界について、子どもたちが考えることができる機会となった。子どもたち自身が生成 AI についてのメリット・デメリットとまとめ、生成 AI の使用ルールを策定した。子どもたちが生成 AI を使用するには年齢に応じて保護者の同意が必要となるため、同意書を作成し、子どもたちが策定したルールとともに保護者へ配布し、同意を得た。保護者の同意を得たのちに、子どもたちは Microsoft が提供する「Copilot」という生成 AI を使用して、AI との対話の仕方、プロンプト（指示）の書き方など使い方について学習を進めた。



生成AI　使用のきまり　2024.10.25策定

1. 正しい使い方で使う
   - 先生が許可した方法で使用する
   - ルール通りに使う
2. 過度な使用を避ける
   - 休み時間や家で使う場合など、
   - 必要な時以外は使わない
   - 遊び目的で使わない
   - 使いすぎない
3. 著作権とプライバシーの保護に気を付ける
   - 著作権に抵触しないような使い方をする
   - 著作権のある内容をそのまま使わない
   - 個人情報を安易に使用しない、漏洩しないようにする
4. 使用場面・使用方法を考える
   - アドバイスが欲しい時に使う
   - 誤字などのチェックに使う（最後の確認で使う）
   - 大体のイメージが欲しい時に使う
   - 話し相手が欲しい時に使用する
   - 生成AIが生成した文章等は参考程度に使用する
   - 自分の力でやらなきゃいけないもの（レポート、作文、宿題など）には使わない
   - 使用した場合は生成AIを使用したことを記入する
   - 信用しすぎない
   - 間違った情報と正しい情報を見分けるようにする
   - 調べる時は最後の手段として生成AIを使う

生成 AI の使用ルール（上幌向中学校２年生作成）

令和６年８月２８日

保護者各位

岩見沢市立教育研究所　所長　砂川昌之
岩見沢市立第二小学校　校長　澤口純一

学習活動における生成 AI の活用について

平素より、岩見沢市の教育活動にご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。
さて、本年度、岩見沢市立第二小学校の第５学年及び第６学年では、岩見沢市立教育研究所情報教育部会の研究の一環として生成 AI（人工知能）を活用した授業の研究を計画しております。
本研究につきましては、生成 AI を学習活動で利用することにより、児童の創造力や問題解決能力を高めることが期待される一方で、個人情報の取り扱いや著作権に関する注意が必要です。そのため、当該学年において、これまで生成 AI の利用についてのメリット、デメリットについて話し合うとともに、文部科学省の暫定的なガイドラインに基づき、児童が主体となって活用に関するルールを作成してきました。
つきましては、本研究の意義並びに趣旨をご理解いただき、学習活動における生成 AI の活用に同意いただける場合は、以下の内容をご確認の上、９月６日までに同意書をご提出いただきますようお願い申し上げます。
なお、同意いただけない場合は別の方法で学習を進めるため、授業の進度や内容の理解に支障がないことを申し添えます。

記

１．利用目的
・情 報 収 集：問題解決のための情報収集の補助として活用等
・文章作成支援：学習のまとめや作文を作成する際の「たたき台」や文章のチェック等
・学 習 の 補 助：プログラミング、調査物のまとめ、意見集約等
・情報モラル教育：情報活用能力の育成等

２．利用ツール
・Copilot（Microsoft）無償版
※　Copilot に関するページは、右の二次元コードから確認ができます。

３．留意点
・個人情報やプライバシーに関する情報の保護を徹底します。
・自身の安全、人権、情報の吟味、法令の遵守の指導を徹底します。
・教員の監督のもとで適切に利用します。

切り取り線

切　９月６日

学習活動における生成 AI の活用に関する保護者同意書

岩見沢市立第二小学校長　様

児童の学習活動における生成 AI の活用について理解し同意します。

令和６年　　月　　日

年　　組　児 童 氏 名（自筆）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

保護者氏名（自筆）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

生成 AI 同意書（第二小学校）

② 「各教科等の学びにおいて積極的に用いる段階」

各教科の活用については、第二小学校で６年生社会科、上幌向中学校で２年生保健体育科において活用を進めた。生成 AI について学習していることもあり、子どもたちは生成 AI の使用について慎重な姿が見られ、生成 AI をどの場面で使うことが望ましいのか、生成 AI の文章が本当に正しいのかを考えながら使うことができており、自分にはない視点やアイディアを得るために活用することができていた。

③ 成果と課題

ア　成果

・「情報収集の補助」としての活用

問題解決に向けた情報収集の際に、気づかなかった点や調べきれなかったことについて、生成 AI からアイディアを提供してもらい、活用することができた。また、教科書やインターネットで調べた内容について、理解できない用語や文章を「小学生に分かるように説明してください」と生成 AI に指示することで理解を深めることもできた。

・「まとめの内容確認」としての活用

生成 AI の活用に慣れてくると、子どもたちからはさまざまなアイディアが

出されるようになった。そのひとつが、「学習のまとめ」が「学習問題」と正対しているのか確認に使うというアイディアである。それまでは、発言することに前向きな児童生徒が中心になって「学習のまとめ」を考えていたが、それらの児童が間違えていたり、その時間に身につけなければならないことを見落としたりしていることがあった。そこから生成 AI に「学習問題」と授業で調べた大切なキーワードを入れて、「このまとめで合っているのか」と生成 AI に問いかけ、その回答の真偽を見極めてまとめるという姿が見られた。

イ　課題

・学習の基盤となる資質・能力の育成

生成 AI を使用する際にはプロンプト（指示語）が必要となる。プロンプトの書き方、質問するための文章表現については、学習の基盤となる資質・能力である「言語能力」「問題発見・解決能力」「情報活用能力（情報モラルを含む）」の３つの力がより一層重要となり、バランスよく育てていく必要性を感じた。

・生成 AI の活用方法

生成 AI をどのような場面で活用するのかが課題である。学力が高位の子どもは使い方をよく理解し、生成 AI に「答え」を求めるのではなく、ヒントをもらいながら追究していく姿が見られた。しかし、学力が低位の子どもについてはすぐに「答え」を求める傾向が見られた。そのような子どもには、「生成 AI 自体を学ぶ段階」から「使い方を学ぶ段階」の中で十分な支援が必要となる。

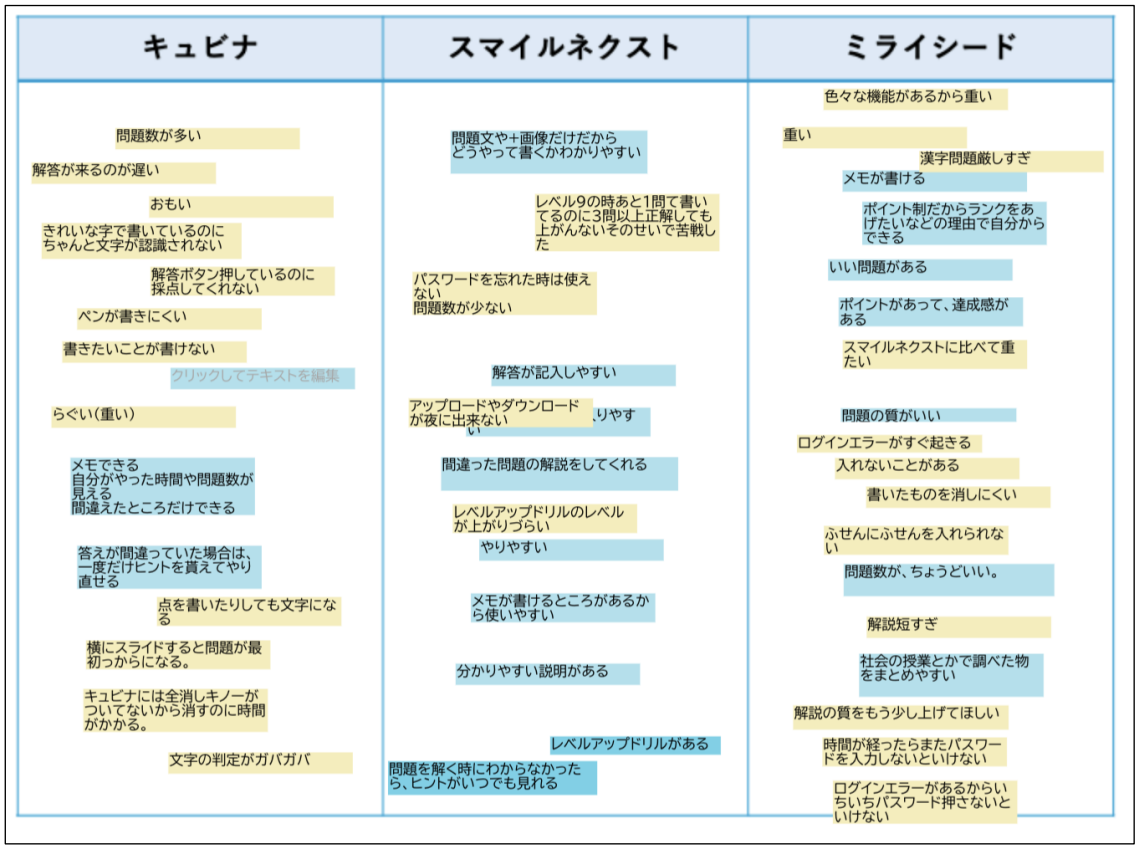
・教員による生成 AI の使用

子どもたちが家庭で生成 AI を使い始める前に、リテラシー教育や情報モラル教育を徹底しなければ、子どもたちの技術に大人がついて行けなくなることも考えられる。SNS やインターネット上の動画サイトでは、生成 AI の使い方のみを説明しているものが多い。それらの動画を見るだけで、文章の作成だけではなく、イラストや写真、動画、音楽などの生成が簡単に行えてしまう恐れがある。文部科学省のガイドラインでも示されている通り、教員が生成 AI という新しい技術に慣れ親しみ、利便性や懸念点、賢い付き合い方を知っておくことで適切な教育活動を行うことができると考える。今年度、情報教育部会では市内の教職員向けの ICT 研修講座において生成 AI について学ぶ講座を２回開催したが、この取組を継続していくとともに、今後は各学校での教員研修も進めていくことが必要と考える。

（３）AI ドリル等を活用した研究授業の実施とその姿の検証

市内小中学校においては各学校の判断に基づき、AI ドリル等の採用ならびに選定を行なっている。さまざまなサービスがある中で、子どもの学習意欲向上と基礎学力定着を図るにはどのような視点が必要なのか、検証を進めた。研究授業の実施までは至らなかったが、研究主体校・連携校を中心に導入している AI ドリルについて情報共有を行った。また、研究主体校・連携校においては各学校で採用している AI ドリルに加え、ドリルパーク（ミライシード）の運用を試験的に行った。

第二小学校の６年生（２１名）では「Qubena」「スマイルネクスト」「ドリルパーク（ミライシード）」の３つの AI ドリルを子どもたちが自己の判断で活用した。冬季休業前にそれぞれの AI ドリルの良い点・悪い点を子どもたちがまとめ、子ども目線でのフィードバックを得ることができた。子どもたちの意見からは、問題の量、通信速度、文字認識の程度、解説の質などさまざまな課題が見えた。



岩見沢市教育委員会においては、Qubena 導入校で学力向上に対する効果検証を行なったという報告を受けている。この効果検証では、Qubena での学習が児童・生徒の基礎学力定着に寄与することが示唆された。一方で、他の AI ドリルでも同様の結果になりうる可能性も秘めており、さらなる検証が必要と考える。

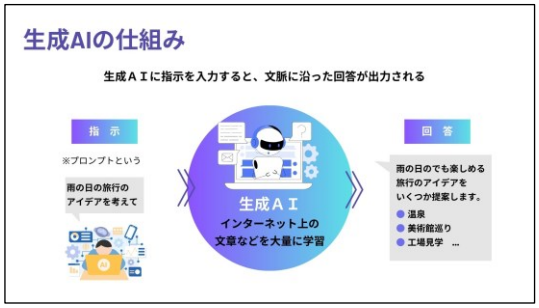
今後は AI ドリルが児童・生徒の基礎学力定着に寄与するかという視点に加え、児童・生徒の学習意欲向上や使用しやすい UI（ユーザーインターフェイス）、学習履歴を把握し指導に生かす機能など、さまざまな視点で AI ドリルの比較検証を行う必要がある。

（４）教職員の ICT 機器等の活用能力向上に向けた研修会の実施

岩見沢市内で一人一台端末が導入されたことに伴い、情報教育部会が ICT 研修講座を開講して４年目になる。本研究においては、教職員向けの研修講座を夏季休業中と冬季休業中の計２回実施し、教職員の ICT 機器活用能力の向上を目指した。

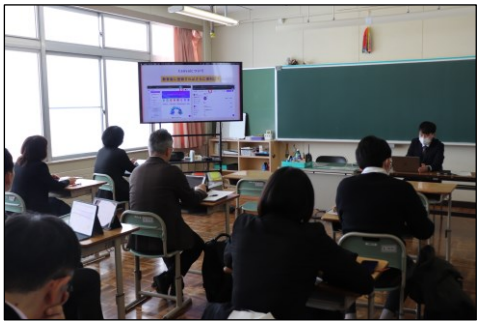
① 夏季研修講座の実施

夏季研修講座では「ロイロノート」「Classroom・Google フォーム」「スライド（Google）」「生成 AI」の４つの講座を開設し、参加者が自身のニーズに合わせて３つの講座を選択し受講するという形式で実施した。研修後のアンケートでは、「使用方法の確認、新たな気づきがあって良かった」「授業での活用方法が色々聞けて勉強になった」「生成ＡＩについても初めて知ることができた」など肯定的な意見が多く寄せられた。



② 冬季研修講座の実施

冬季研修講座では、「Canva」「生成 AI」「Google Chat」の３つの講座の開設に加え、「ICT に関わる操作や活用方法に関する個別相談」も実施した。



研修後のアンケートでは、「生成 AI について知ることができ、授業準備や資料作成などの効率化の部分で活用できると期待している」「生成 AI の講座を聞いて、使う、使わないで足踏みをしている状態と、使っていて子ども達に何を考えさせるか、どうリテラシーを育てるかという状態では、すごく格差を感じた。」「生成 AI について本校での活用がまだまだであることがわかり、発信していきたいと思う」などの意見が多く寄せられた。

③ 成果と課題

ア 成果

夏・冬２回の研修講座を通して、教職員の ICT スキルの向上を図り、日々の学習や校務等に役立つ活用方法を紹介することができた。

イ 課題

講座内容については、各サービスやアプリケーションの基本的な使い方の紹介にとどまってしまったため、効果的に活用するためには具体的に授業のどの場面で活用するかなどについて学べる講座内容を考える必要がある。

６ 研究主体校・連携校との連動

子どもたちの「主体的・対話的で深い学び」を実現するには、どのような授業が必要なのか。また、その授業で ICT 機器をどのように活用することが望ましいのかという視点に立ち、授業研究を進めた。今年度は問題発見・解決型の授業いわゆる探究的な学習を通して、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実が図れるのではないか、という仮説のもと検証を進めた。また、問題発見・解決型の授業を通して、子どもたちが主体的に学ぶための学習スキルを身につけ、子どもたち自身が ICT の活用方法について自己選択できるようになるにはどのような手立てが必要なのかという視点ももちながら授業実践を行った。情報活用能力の育成についても「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」の学習プロセスを意識した授業を行い、子どもたちがそれぞれの学習プロセスにおいて必要なスキルを身につけられるよう支援を行なった。

（１）公開研究授業

ア 第二小学校（６年生）

日時：１１月１４日（木）

単元：社会科「明治の国づくりを進めた人々」

授業者：戸澤 卓真 教諭

本授業では、子どもたち一人一人の必要感に応じて、教科書、資料集、関連書籍、インターネット、生成 AI などを活用して情報収集を行なっていた。収集した情報をタブレット上で思考ツールにまとめたり、ノートに手書きでまとめたりしながら整理・分析を行っており、アナログとデジタルを行き来しながら、主体的に問題解決に向かう姿も見られた。授業の導入場面では教師が動画生成 AI で生成した動画を提示して、子どもたちの問題発見を促すといった教師による生成 AI の活用についても実践されていた。

イ　上幌向中学校
日時：１１月１５日（金）
単元：保健体育科「バスケットボール」
授業者：平尾　陸　教諭

本授業では練習メニューを考える際に、自分たちのチームの課題を明らかにし、その課題解決のためにはどんな練習方法があるか、生成 AI にアイディアをもらう姿があった。また、練習や試合の映像を撮影し、チームで振り返るなどして、ICT 機器を効果的に活用していた。第二小学校の公開授業と同様に生徒が主体的に練習時間や練習方法を話し合って決めて進めており、主体的に学ぶ姿があった。

どちらの公開研究授業においても、ICT を効果的に活用する場面があったとともに、子どもたちが主体的に学ぶための学習スキルを身につけ、自律した学習者へと育ちつつある。また、的確な学習問題を設定できなければ、「深い学び」には到達できないという課題も見られた。「課題の設定」場面でいかに子どもたちにとって必要感がある問いかけができるか、的確な学習問題の設定を支援できるかが鍵となる。

７　成果と課題

（１）成果

① ICT 活用による授業改善

研究主体校による公開研究授業では ICT 機器の活用を目的化することなく、授業の目的に合わせてアナログとデジタルを往還しながら ICT を効果的に活用し、「深い学び」へと向かうことの重要性を示すこともできた。また、「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、子どもたちが主体的に学ぶための学習スキルを身につけ、子どもたち自身が ICT の活用方法について選択するなど、自律した学習者へと近づくことができた。

② 生成 AI 等を活用した学習活動

本研究における生成 AI を活用した授業は、パイロット的な取組になったと捉えている。生成 AI 自体を学ぶ活動を出発点とし、教師とともに生成 AI の使い方について学び、子どもたち自身が生成 AI の使用ルールを考えることで、生成 AI の可能性とその限界について理解した上で活用することができた。

③ 教職員の ICT スキルの向上に向けた取組

夏・冬と２回の研修講座を通して、教職員の ICT スキルの向上を図ることができた。教育現場で活用できるアプリやサービスについて、その基本的な操作等について支援した。

特に夏・冬どちらの研修講座でも取り上げた「生成 AI」については参加者の興味・関心が強く、研修講座参加者によるアンケートの回答からも生成 AI について学びたいという姿勢が見て取れた。「生成 AI」については今後も研修講座の中で扱うとともに、各学校での教員研修を進められるような手立てを検討していきたい。

（２） 課題

① 生成 AI 等を活用した学習活動

文部科学省は令和６年１２月２６日に「初等中等教育段階における生成 AI の利活用に関するガイドライン（Ver.2.0）」を公表した。ここでは、「人間中心の利活用」と「情報活用能力の育成強化」を２つの軸とし、生成 AI はあくまでも道具として捉え、人間の判断や教師の役割の重要性を強調している。また、「情報活用能力」は学習の基盤となる資質・能力であり、生成 AI を使いこなす能力を育成していく必要性が示されている。情報活用能力を育むための学習活動のあり方について、今後も検証を進めていく。

② 児童生徒の情報活用能力育成に向けた実態調査と育成に向けた取組

情報活用能力診断ツール「ジョーカツ」を活用して、児童・生徒の情報活用能力の実態調査を行い、これまでの教育活動における成果と課題を把握できた。今後は情報活用能力の育成に向けた具体的な取組等について検証を進めていく。

③ 基礎学力の定着を目指した AI ドリル等の活用

各学校で導入している AI ドリルが違うことや、効果検証を行う時間の確保など、検証を進めることが難しい部分があり、十分に検証を進めることができなかった。今後は各 AI ドリルの比較表を作成するなどして、現状あるサービスを整理するとともに、 AI ドリルを活用している教員、児童・生徒のフィードバックを集め、より良い AI ドリルの活用の仕方について検証を進める。

④ ICT 活用による学校現場における校務軽減

研究主体校・連携校で各学校が行っている校務改善について情報共有することができたが、具体的な取組等を示すことはできなかった。今後は市内の各小中学校が導入できるような取組を検証していきたい。

８　担当

部長：平尾　陸（上幌向中学校）
部員：黒坂　俊介（第二小学校）中村　太志（岩見沢小学校）　田中　健太（メープル小学校）
　　柴田　諒（緑中学校）

「Ⅲ　養成」事業について

今日はここから
【ケース③】
事務職員　「A先生，○○君の保護者の方からお電話です」
A先生　「もう勤務時間が過ぎているので，出られません」

経営塾『経営力を磨く会』

１　主　　旨

次代につながる学校教育の具現化に向け、教育を取り巻く現状を認識し、学校改善にむけて分かりやすいビジョンを掲げ具体的で実効性のある取組を進めることができる実践的な経営力のある校長を養成する。

岩見沢市が掲げる学校教育について深く理解し、「一人一人の子どもを主語にした教育」の実現にむけての思いを共有しその力量を十分発揮できることを期待する。

２　目　　的

本会は岩見沢市の教育行政方針に基づく自校の確かなビジョンを掲げ、経営・運営できる管理職の育成を目的に実施する。

３　内　　容

（１）現状をしっかりと認識し、その変革に向けて、リーダーシップの発揮について
（２）今後の学校教育について自分の言葉で語り、変革に向けた道筋の企画・立案について

４　参加者

校長　４名　　教頭等　２６名

５　実施した講義・演習（９０分間）

６月１３日(木) ＝ 「『経営塾』参加への思いの共有」・オリエンテーション
　　ファシリテーター　岩見沢市立教育研究所　砂　川　昌　之
８月２０日(火) ＝ 「児童生徒と学校を守る危機管理」（講義・演習）
　　講師　空知教育局　義務教育指導監　眞　田　　眞　氏
１０月１０日(木) ＝ 「義務教育と高校の接続はいかにして可能か」（講義・演習）
　　講師　代々木ゼミ教育総研主幹研究員　林　　正　憲　氏
　　（元　北海道札幌北高等学校長）
１２月　２日(月) ＝ 「学校を動かすスクールリーダーの言葉かけ」（講義・演習）
　　講師　岐阜聖徳学園大学　教授　山　田　貞　二　氏
２月　６日(木) ＝ 「これからの学校づくりにむけて」（講話等）
　　講師　北海道教育庁学校教育局義務教育課
　　課長補佐　田　中　智　則　氏

６　今年度を振り返って

今年度は、確かなビジョンに基づく改革を進めることができるスクールリーダーとなるために、今日的な教育課題について、その本質に深く理解することにとどまることなく、自らの言葉で教職員や保護者・地域に語り学校経営に落とし込むことや、学校改善や教職員を成長させるための具体的な方略等について深めることができた。参加者の振り返りからも「自身の成長に繋がる貴重な機会となった」「パーパス（目的）とゴール（目標）を明確に区別することの重要性を理解した」など、多くの気付きとともに、学校改善に向けての大きな意欲を感じるものとなった。

養成塾『教師力を磨く会』

１　主　　旨

教育の成否は、学校教育の直接の担い手である教員の資質と能力に負うところが極めて大きい。学校が、公教育の責務を果たすためには、組織体としての機能を最大限に発揮することが求められる。そのためには、教師力に優れ、指導力と実践力を持ち合わせた教員の存在が重要であり、そうしたミドルリーダーの養成が学校教育の成否のカギを握ると言える。

２　目　　的

本会は、岩見沢市が目指す「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業を創り上げ、それを中核とし学校経営・学校運営に主体的に参画できる教員の育成を目的とする。

３　内　　容

（１）学校経営・学校運営やその参画について
（２）「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業づくりについて
（３）若手教員への指導と助言について

４　参加者

主幹教諭８名、教諭１３名、合計２１名

５　実施した講義・演習（９０分間）

６月２６日（水）＝オリエンテーション、自己紹介、自己目標設定
講話「岩見沢市のミドルリーダーに期待すること」
講師　教育委員会　教育長　吉　永　　洋　氏
８月２１日（水）＝講話・協議「学校を動かすミドルリーダー」（講義）講師
講師　緑中　校長　小　野　篤　夫　氏
１０月２３日（水）＝説明・協議「主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業の実際」
講師　日の出小　教諭　辻　　啓　吾　氏
南小　　教諭　下　野　里　紗　氏
光陵中　　教諭　辻　浦　一　裕　氏
１２月２４日（火）＝説明・協議「若手教員を育てる」
講師　南小　　教諭　渡　部　由　佳　氏
緑中　主幹教諭　成　田　照　行　氏
２月１９日（水）＝振り返り「ミドルリーダーとして」

６　今年度を振り返って

今年度は、校長の示す経営ビジョンを理解し具現化するミドルリーダーとしての役割を理解し、学力向上などの学校経営・学校運営での課題解決に向け、授業づくりなどに率先して取り組むベテラン・中堅教諭としての役割を果たすことができるように研修を深めてきた。授業づくりの実践や若手教員への指導・助言の実際について、ミドルリーダーとしての役割を果たしている姿を共有し、組織運営に務めるベテラン・中堅教諭の資質向上とすることができた。一方で、参加者が少なく広く研修を深めることが十分にできなかったことを踏まえ、次年度は日程の変更など多数が参加できる研修の場にしたい。

実践塾『授業力を磨く会』

１　主　　旨

教育の成否は直接の担い手である教員の資質と能力に負うところが極めて大きい。また、教員の指導力が最も発揮される場面は授業である。そのため、市内の初任者及び教職１０年未満の教員を対象に授業力の向上に特化した研修を行うことにより、全ての教員が質の高い授業を日常実践できるよう本塾を実施する。

２　目　　的

本会は、授業力・指導力の向上に特化した人材育成と実践力の育成を目的に実施する。

３　内　　容

（１）授業講座・研究協議
（２）授業公開による実践研究
（３）実践力・指導力向上に向けた実践研修

４　参加者

教諭３１名、養護教諭４名、合計３５名

５　実施した講義・演習（９０分間）

６月２５日(火)＝説明、自己紹介、演習（目標・年間計画・グループ編成・交流）
８月１９日(月)＝「授業づくりの基本」（講義・演習）
講師　東光中学校　阿部　駿也　氏
１０月２３日(月)＝「授業づくりの基本」（講義・演習）
講師　日の出小学校　辻　啓吾　氏
１２月２３日(月)＝「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業の実際（実践発表）
２月２０日(火)＝「　　〃　　」（実践発表）と「本年度のまとめ」

６　今年度を振り返って

今年度は実践塾のねらいと岩見沢市の目指す教育の方向性に基づき、「主体的・対話的で深い学び」を授業の中でどのように実現するかを求めて５回実施した。

グループ協議や授業公開では校種や学年・教科等別に五つのグループで、それぞれに授業者を決め、指導案検討や交流を行ったうえで授業公開に基づく実践発表を行った。

また、小学校と中学校の先輩の教員を講師として招き、優れた実践を学ぶことで授業づくりの基本を学び、自らの授業改善に活かすことができた。

養護教員部会は市の教育支援センターの袖野ＳＳＷを助言者に、各参加者の事例検討に基づいたケーススタディなどの研修を行った。

秋山塾長と三浦副塾長・山本養護教諭が率先して塾生の先頭に立ち、塾生相互が切磋琢磨しながら、実践的指導力の向上に向けた研修を深めることができた。

「Ⅳ　研修」事業について

教職員の専門的力量向上のための研修講座

１　「岩見沢の教育を語る」研修講座

・日時　令和６年４月１５日（月）１５：００～１６：００
・内容　「岩見沢市の学校教育にかかわる思い」
　　「授業改善の取組」
・講師　岩見沢市教育委員会　　教育長　　吉　永　　洋　氏
　　岩見沢市立中央小学校　主幹教諭　鹿　野　哲　子　氏
　　教諭　北　島　桂　子　氏

今年度岩見沢市に転入された初任者からベテランの教職員８８名を対象に、教育長の学校教育にかかわる思いと期待を感じ、岩見沢市の教職員としての自覚と今年度の方向性と各自の目標を明確にするともに、これまで岩見沢市で進めてきた授業改善を中核とした学校教育の推進について理解を深めることをねらいとして本研修講座を開催した。

教育長からは、「子どもが煌めく教育づくり」について、特に、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業づくりの推進と、学習スキルの向上と学習ルールの徹底による確かな学力の育成の重要性について説明がされた。また、学校として統一性・一貫性のある校内研修について各学校での実現についてのお話があった。後半は、岩見沢市立中央小学校での校内研修の概要について説明がされ全教職員が一体となってめざす子ども像を共有するとともに、その実現に向けた取組が紹介された。参加者からは、「教育長から岩見沢の教育に力を入れていこうとする気持ちが伝わってきました」「中央小学校の統一した実践報告がとてもわかりやすかったです」「初めて岩見沢にきて、まだわからないことも多いですが、今日得たことが毎日の実践などでつながるようにしたいなと思いました」などの感想が挙げられ、教育長の思いが、転入教職員に確実に伝わり、岩見沢のめざす教育の実現に向けて、明日からの教育実践へ生かされる研修となった。

２　特別支援教育研修講座

・日時　令和６年５月２３日（木）１４：００～１６：００
・内容　講義・演習「障がいの特性を考慮した教育課程の編成と実施」
・講師　北海道立特別支援教育センター自閉症・情緒障がい教育室長　日小田　泰　昭　氏

５月２３日（木）、北海道特別支援教育センターの日小田主任研究員（自閉症・情緒障がい教育室長）を講師としてお迎えし、市内各小・中学校の管理職と特別支援教育コーディネーター等の４６名を対象として「特別支援教育研修講座」を実施した。

講師からは、具体例を交えながら、特別支援教育の法令・制度面等に関し、多様な学びの設定事例、望ましい交流及び共同学習のあり方、一人ひとりに応じた自立活動の実際や特別の教育課程の編成の留意点等について、大変わかりやすい説明をいただいた。

参加者からは、「『交流及び共同学習を見直す視点』が参考になったので明日から一つ一つ見直していきたい。」、「保護者への正しい特別支援の理解を図るため、本人や保護者の意向を聞くことの大切さがわかりました。そのために正しい知識を持って接していきたい。」、「特別支援教育センターで発信している資料について活用し、今後も研修を深めたい。」、「本校の自立活動の指導に関しては、その意義を確認し、早急に取り組みを見直す必要のある課題であると感じたので、見直していきたい。」等々の感想があり、多くの気付きや刺激を得ていた。

３　「特別支援教育支援員」研修講座

・日時　令和６年６月２１日（金）１４：００～１６：００
・内容　講義・演習
　　「特別支援教育支援員の基本的な役割と心構え、対応の実際について」
・講師　北海道教育庁空知教育局教育支援課主任指導主事　油　川　智　史　氏

空知教育局の油川主任指導主事を講師としてお迎えし、市内の特別支援教育支援員２７名を対象として、標記研修講座を実施した。

講師からは、特別支援教育支援員の基本的な役割と心構え、学級担任と連携して行う子どもへの対応の在り方等について大変わかりやすく講義をいただき、特に、子どもを効果的に褒める視点として能力ではなく努力を褒めることや、子どもの「こうなりたい」という気持ちを引き出す支援の工夫などの話の際には、参加者がうなずきながらメモを取っている様子も多く見られた。また、随所に演習の場面を入れたり、互いの考えを交流する時間を確保したりすることで、参加者の主体的な参加が促されていた。

参加者からは、「自分の支援の仕方を振り返り、見つめ直す良い機会になりました。」、「子どもの得意なこと、できることに目を向けてあげるということを実践していきたいと思えました。」、「子どもが主体的に『こうなりたい』と思えるような支援ができるようになりたいと考えが改まりました。」等々の感想があり、明日からの支援に生きる有意義な研修となった。

４　事務職員研修講座

・日時　令和６年７月１２日（水）１４：００～１６：００
・内容　講義・演習「学校事務職員としての役割や職務について」
・講師　南小学校事務主任　井　上　　基　氏

南小学校の事務主任である井上基氏を昨年度に続けて講師として、市内の若手事務職員４名の参加のもと、標記研修講座を実施した。

講師からは、現在の勤務校での業務やその内容などを中心に、自分が心がけていることやこれまでの勤務校での体験談も交えての講義をいただき、その後の意見交流や協議の場で参加者からそれぞれの業務での成果や課題、疑問に思っていることなどが発表して、解決に向けての交流がなされた。

日々の勤務で悩みを抱えていた参加者から、「業務での悩みを共有できた上に、さらに解決に向かえる方策などを聞くことができて大変有意義だった」「今後に向けて勉強することができた」「事務職員として学校内での児童生徒との関わりについて悩んでいたが、今日の話し合いを経て今後の在り方ついて貴重な意見を得ることができた」との感想が聞かれ、有意義に研修を終えた。

５　「食物アレルギー」研修講座

・日時　令和６年７月３０日（火）１０：３０～１１：５０
・内容　講義・演習
「食物アレルギーの正しい理解とアナフィラキシーショックに対する対処の仕方について」
・講師　管理薬剤師　櫻　田　則　幸　氏

今年度岩見沢市に転入してきた小・中学校と緑陵高校の教職員５６名を対象に食物アレルギーの正しい理解とアナフィラキシーショックに対する対処の仕方を理解し、適切に対応できる能力を養うため、演習も含め１時間半の研修を行った。

今年度は市内の薬局に勤務する管理薬剤師を講師に迎えて講義と動画視聴によるアレルギーへの理解や緊急時での対処の仕方、エピペンの打ち方に関する演習をロールプレイングなどを交えて学んだ。

参加者からは、「実際に起きた場合は時間との闘いだと改めて知ることができ、緊急時に備えるための役割分担を準備しないといけないと感じた。」「勤務校にエピペンを処方されている子がいるので、今日学んだことを活かしていきたい。」「教員として子どもの急なアレルギー反応に対応しなくてはいけないので、今回の研修講座はとても勉強になりました。」「自信を持って対応していきたい。」などの感想が寄せられ、児童生徒の安全・安心な学校づくりに活かされる研修講座となった。

６　「救急・救命」研修講座

・日時　令和６年７月３１日（水）、８月１日（木）１３：００～１６：００　２回実施
・内容　講話・実技講習「救命への心構えと救命処置の方法」
・講師　岩見沢地区消防事務組合署員

今年度岩見沢市に転入してきた小・中学校と緑陵高校の教職員５６名を対象に、適切な応急手当を行う能力を養うため、３時間講習を２日間にわたって合計２回実施した。

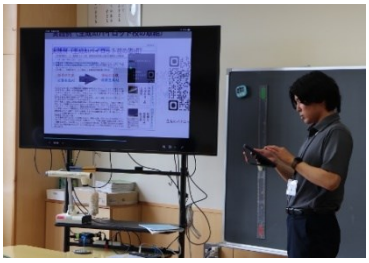
当日は、前半を動画による応急手当などの救命処置の仕方などを視聴した後、後半は３つの小グループに分かれてＡＥＤや心臓マッサージなどの実技を含めて学習し、参加者には後日、消防署から修了証が交付された。

参加者から、「久しぶりの救命講習なので、勉強になりました。特に心臓マッサージの回数が増えていたり、胸骨圧迫の具合など新しいことを知ることができました。」「講習を受けてやり方を知っ

ても実際に救命処置ができるか不安でしたが、今後もしっかり学習して処置できるようにしたいと思います。」「脳に酸素を送り続けるため胸骨圧迫をやり続けることが大切だとわかりました。自分ができることとして常に覚えておきたい。ＡＥＤも戸惑うことなく勇気を出して使いたい。」など、児童生徒の安全・安心に学校づくりに活きる研修講座となった。

７　ＩＣＴ活用に関する研修講座Ⅰ　初級・中級者対象

・日時　令和６年８月２日（金）１０：００～１２：００
・内容　〇講座Ａ「ロイロノート・スクール」各機能の説明と演習
　　〇講座Ｂ「Classroom Google フォーム」使い方とできること
　　〇講座Ｃ「スライド（Google）」各機能と使い方
　　〇講座Ｄ「生成 AI」生成 AI の種類と活用事例
・講師「情報教育」研究部会部員



岩見沢小学校において、３２名の参加者のもと、「情報教育」部会に所属する５名が講師となって講座を運営した。今回は４講座を開設し参加者のニーズにあわせて３講座を選択するという内容で研修をおこなった。岩見沢市転入の先生方向けにロイロノートの基本から、話題になっている「生成 AI」についてふれてみるなど、ICT の活用の幅を広げる内容となった。参加者からも「すぐに使ってみたい」「こんな使い方もできる」「授業で活かせそう」などの声が聞かれ参加者にとっては充実した研修となった。

８　ＩＣＴ活用に関する研修講座Ⅱ

・日時　令和６年１２月２７日（金）１０：００～１２：００
・内容　〇講座Ａ　『Canva』　発表・プレゼンテーション等のアウトプットへの活用の実際について
　　〇講座Ｂ　『生成 AI』　授業や校務での活用について
　　〇講座Ｃ　『Chat』　グループチャット機能を活用した協働的な学習の可能性や校務へ活用について
　　〇講座α「ICT に関わる操作や活用について」　個別のお悩みや相談
・講師「情報教育」研究部会部員

上幌向中学校において、２７名の参加者のもと、夏の研修講座Ⅰに引き続き「情報教育」部会に所属する部員が講師となって講座を運営した。

今回の研修では、研修講座Ⅰからの要望等を踏まえ、より実践場面を想定し活用を図ること

ができることをめざして研修を進めた。

講座 A「Canva」では、子どもたちが具体的に発表に活用できるよう操作等を学んだ。講座 B「生成 AI」では、音楽や動画作成など、いろいろな「生成 AI」の紹介と、校務での活用等の可能性について研修を深めた。講座 C「Chat」では、事前に Chat グループを作成し、グループ内でのやり取りを体験してもらうとともに、実際に活用している学校の紹介などをしてそのよさについて学んだ。

参加者からは、「初めて知る内容が多く、とても勉強になった」「AI に関する講座が印象的で、AI の活用に対する理解が深まった」など、多くの新しい知識が獲得できたことや授業や業務で即活用できるツールや方法を学べたことが評価された。

また、「生成 AI」の活用では、AI を使うかどうかで教育現場に格差が生じることを感じた参加者が多く、AI リテラシーの重要性を感じるなど、今後の取組の課題や取り入れる視点についての気付きも生まれていた。

新しいことを学ぶ楽しさを感じたという意見も多く、先生方自身も学ぶ楽しさを得られた研修会となった。

９　不登校対策研修会

・日時　令和６年８月６日（火）９：００～１２：００
・内容　講義・演習
　　「不登校の未然防止と対応」
・講師　北海道文教大学　教授　石垣　則昭　氏

石垣教授を講師としてお迎えし、各小・中学校の生徒指導担当者（各学校１名）に加え、希望する教諭及び養護教諭３７名が参加し、標記研修会を実施した。

講義では、現在の不登校児童生徒の傾向に基づき、その指導の留意点や具体的な対応、保護者への働きかけや学校としての取り組みの方向性等について大変わかりやすく解説いただいた。また、参加者に見られた交流の姿勢こそが教育相談の基本であると意識を高めつつ、参加者からの質問を取り上げてからそれを価値づけて詳しく説明いただくなど、主体的参加による濃密な研修となった。

参加者からは「担任任せにせず、学校全体で対応していくように意識を変えることが必要だとわかった。」、「不登校の原因を詮索するのではなく、子どもを不登校に陥らせているパーソナリティなどの要因をさぐっていくようにしたい。」、「教えてもらったチェックリストを活用して、分析と支援について考えていきたい。」、「否定や批判をせず寄り添う姿勢などを試しながら子ども自身が教室に居場所ができるようにしていきたい。」など、多くの気付きや刺激を得たことが伝わってきた。

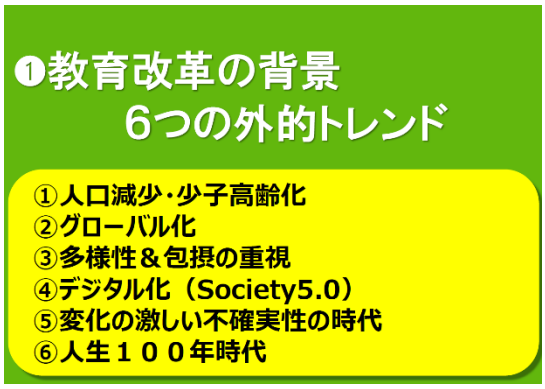
１０　教育講演会

・日時　令和６年９月２０日（金）１４：００～１６：００
・内容　講話「教育の動向・今、学校教育において大切にしたいことは」
・講師　文部科学省初等中等教育局教育課程課長　武　藤　久　慶　氏

講師に文部科学省初等中等教育局教育課程課長　武藤　久慶　氏をお迎えし岩見沢小学校をライブ会場に市内９つのコミュニティ・エリアへテレビ会議システムを活用したハイブリッド型研修として実施した。

武藤氏からは、

① 教育改革の背景６つの外的トレンド
② データで見る我が国の教育と社会
③ 令和の日本型学校教育
　・「個別最適な学び」と「協働的な学び」
　・ギガスクールの推進
④ 日常的な活用を実現している学校の様子からの流れで、今、学校教育で実現したいことについて説明があった。



教育講演会参加者３０２名からのふり返りから、テキストマイニングによるキーワード抽出と生成 AI を活用した分析を行い、武藤氏の講演から市内の教職員の関心・意識の高まり等について次のように考察できた。

１　ICTの重要性
「ICT」が最も大きく表示されていることから、講演の中心テーマであり、参加者にとっても非常に重要なトピックであったことが分かる。

２　教育のデジタル化
「GIGA」「デジタル」「タブレット」などのキーワードが目立つことから、教育のデジタル化が進んでいること、そしてその活用方法について多くの関心が寄せられている。

３　多様性と個別最適化
「多様性」「個別」「最適」などのキーワードから、教育の個別最適化や多様な学びの提供が重要視されていることがわかります。特に、特別支援教育や個別の学習ニーズに対応するためのICTの活用が強調されている。

４　教師の役割とスキルアップ
「教師」「指導」「スキルアップ」などのキーワードから、教師自身のデジタルスキルの向上や新しい教育方法の習得が求められていることが示されている。

５　教育の変革と未来への準備
「変化」「未来」「アップデート」などのキーワードから、教育の変革が急務であり、未来を見据えた教育の準備が必要であることが強調されている。

６　子どもの主体性と学び方
「主体的」「学び」「自走」などのキーワードから、子どもが主体的に学び、自ら学びを進める力を育成することが重要視されている。

７　教育のバランス

「バランス」「アナログ」「急速な」などのキーワードから、デジタル化の進展とともに、アナログの良さも取り入れたバランスの取れた教育が求められていることが示されている。

全体として、武藤氏の講演は、教育のデジタル化とその活用方法、個別最適化、多様性の尊重、教師のスキルアップ、そして子どもの主体性を育む教育の重要性を強調する内容であったことがわかる。これらのテーマは、市内の教職員にとっても非常に関心が高く、今後の教育現場での実践に向けた具体的な示唆を与えるものであったと考えられる。

１１　教頭・研究担当者研究協議会

・日時	第１回	４月２５日（木）	「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業づくりについて
	第２回	７月２９日（月）	①全国学力・学習状況調査の自校採点に基づく分析と授業改善 ②NRT学力検査の結果の分析に基づく取組 ③　これまでの研究授業等の取組
	第３回	１１月１１日（月）	①子どもの変容 ②教員の力量向上
	第４回	１月１０日（金）	「『主体的・対話的で深い学び』の視点に立った授業づくり」にかかわる研究指定校の研究実践について

岩見沢市で進める「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業づくりに向けて、市内全２３校の教頭・研究担当者を対象に「めざす子ども像」「めざす授業像」について共有し、その実現に向けて各学校の創意工夫を図った研究体制や授業実践の充実・推進を図ることをねらいとして年４回の協議会を実施した。

第１回目は、これまでの岩見沢市の授業改善への取組をふり返るとともに、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業づくりについて研究所と黒坂所員から説明・協議し、取組の方向性や具体について協議した。

第２回目は、全国学力・学習状況調査及び NRT 学力検査の市内の状況について共有し、調査結果に基づく校内研究の推進について協議した。全国学力・学習状況調査の各教科の問題から読み取れることを協議したり、小学校から中学校への学力の推移について話し合ったりして、具体的な授業改善の視点や小中連携の重要性について深めていた。

第３回目は、「『主体的・対話的で深い学び』の視点に立った授業づくり」について各学校のこれまでの成果や課題について交流した。特に、子どもの変容と教員の力量向上について協議することを通して自校の研究の方向性の確認や、めざす授業づくりに向けた小中連携の視点に立った研究の推進など、具体的な取組について協議が深まった。

第４回目は、当研究所の４つの研究事業について、今年度のまとめについて報告し、研究内容の普及や次年度に向けて自校の取組への啓発を図った。研究報告においては、研究の視点ごとに、実際の授業の動画による子どもの変容を示し参加者に協議してもらうなど、研究発表の仕方についても提案性をもたせる形で報告した。参加者の協議では、子どもの変容を目指し研究を構築することや授業改善の視点を明確にすることなどを次年度の研究推進の参考とすることを確認・共有した。

「V　連携」事業について

北海道及び全国教育研究所連盟との連携

岩見沢市立教育研究所は、北海道立教育研究所を事務局とする北海道教育研究所連盟に加盟し、総会をはじめ研究発表大会に出席するとともに共同研究を推進している。また、全国教育研究所連盟にも加盟し、オンラインで研究協議会や研究発表大会に参加することで、最新の教育動向に触れる機会を得ている。

１　北海道教育研究所連盟との連携

（１）定期総会　Web 会議サービスによるオンライン開催

・期　日　令和６年４月２４日（水）

・内　容　令和５年度事業及び会計報告、監査報告、令和６年度事業計画案及び予算案、道研連役員案及び全教連北海道地区委員案の承認等

（引き続き、人口減少下にある本道の教育研究所・センターの連携・協働体制の在り方について協議する所長研修会を実施）

（２）第７９回北海道教育研究所連盟研究発表大会（網走大会）兼全国教育研究所連盟北海道地区研究発表大会

・日　時　令和６年８月２９日（木）～８月３０日（金）

・会　場　オホーツク・文化交流センター

・内　容

［記念講演］

演 題 「一人一人の子どもを主語にする学校教育の実現に向けて～自立した学習者を育成するための教育研究所、研修センターの在り方～」

講 師 国立教育政策研究所
初等中等教育研究部長
藤原　文雄　氏

［対話・演習］

タイトル「『研修観の転換』の実現に向けて」

講 師　独立行政法人教職員支援機構員

（３）所員学習会

①　夏季所員学習会　令和６年７月３０日（火）１４：００～１６：３０

・形　態：Web 会議サービスによるオンライン開催

・内　容：北海道の課題や所員のニーズに対応した内容に関する講義・演習等

②　冬季所員学習会　令和６年１１月２１日（木）１３：００～１６：００

・形　態：Web 会議サービスによるオンライン開催

・内　容：北海道の課題や所員のニーズに対応した内容に関する講義・演習等

２　全国教育研究所連盟との連携

（１）全国教育研究所連盟研究発表大会（秋田大会）　オンラインにて開催

・日　時　令和６年６月７日（金）　１０：００～１６：３５

・内　容

［講演］

演 題 「生徒指導提要（改訂版）」が示す学習指導と生徒指導の一体化に向けて

講 師　関西外国語大学　教授　新井　肇　氏

［研究発表］６機関からの課題研究報告

北海道教育大学岩見沢校等との連携

北海道教育大学岩見沢校の先生方の協力を得て、体育科の出前授業を行っている。今年度は、体育科の出前授業を北海道教育大学岩見沢校とコンサドーレ北海道スポーツクラブの協力をいただき、市内各小学校で実施した。

１　出前授業

（１）　体育科

「ボール運動」　講師：教育大学岩見沢校　教授　奥田　知靖　氏

①メープル小１、２年（８名）　９月　２日　②東小１年（３０名）　９月　４日
③日の出小２年（１２名）　９月２６日　④第一小２年（６４名）　１１月　５日

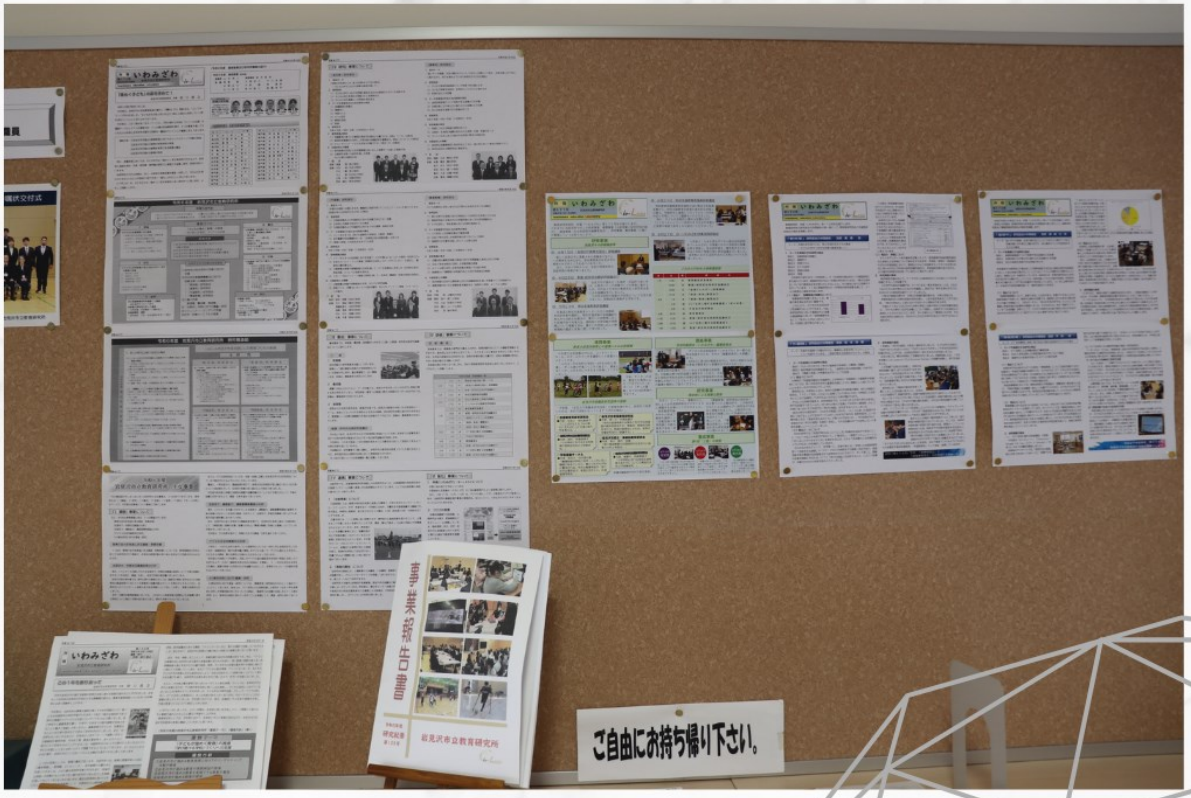
「アダプテッド・スポーツ」　講師：教育大学岩見沢校　准教授　大山　祐太　氏

①幌向小５年（４７名）　７月２５日　②日の出小６年（５５名）　１１月１２日
③第一小４年（５３名）　１１月２５日　④栗沢小５、６年（３５名）１２月１１日

「サッカー」　講師：コンサドーレ北海道スポーツクラブコーチ　金澤　孝憲　氏ほか

①北村小１、２年（１９名）　７月　４日　②美園小５年（３０名）　９月　５日
③中央小５年（６１名）　１１月１４日　④北真小５年（１６名）　２月１３日

「Ⅵ　普及」事業について



情 報 の 発 信

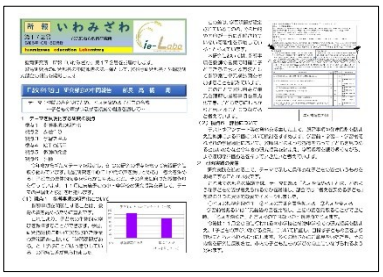
1　所報「いわみざわ」の発行……年間５回

昨年度までの所報と短信を合一し、今年度からは所報「いわみざわ」として年５回発行している。うち初号と最終号は紙媒体で、中間の三号は PDF ファイルによる配信で、市内の小中学校の教職員に配布している。

（１）第１７０号を５月１６日に発行（紙媒体）
令和６年度のⅠ～Ⅵの６つの事業について、今年度の計画の概要を紹介した。

（２）第１７１号を７月１２日に発行（PDF ファイル）
夏季休業前までの研修講座の実施の状況と今後の研修講座の予定、出前授業の様子や社会科副読本編纂委員会、指定校による公開研の様子や養成事業の実施状況等について掲載した。

（３）第１７２号を１０月１８日に発行（PDF ファイル）
教育研究所の４つの部会研究で取り組んでいる中から「教科等研究部会」と「外国語研究部会」の中間報告を掲載した。



（４）第１７３号を１２月１６日に発行（PDF ファイル）
前号に続き、「道徳科研究部会」と「情報教育研究部会」の中間報告を掲載した。

（５）第１７４号を２月２８日に発行予定（紙媒体）
今年度の各事業における取り組み内容を総括する予定。

２　研究所「ブログ」での発信……随時

４月に行っている年度初め授業公開、所員の委嘱状交付式、運営委員会の様子をはじめ、当所を会場にして行われる各種研修会の内容、４つの部会ごとに行われる授業公開の状況、北海道教育大学岩見沢校と連携して行っている出前授業、その他研究所から市内の学校に向けた適時的な情報発信を行う手段としてブログを活用している。

昨年度は１９件の記事の投稿であったが、今年度は１月までで３６件とほぼ倍増している。

所報のほか、各種の資料もダウンロードできるようになっており、市内の学校にとって役立つ内容となるように、今後も運用を継続していく。

岩見沢市教科書センターとしての機能

１　常設展示

・市内の小学校（令和６～９年度使用）、中学校（令和３～６年度使用）及び緑陵高等学校が現在使用している教科用図書を展示

２　令和７年度用　中学校の教科用図書展示会

・中学校が令和７年度用として採択する教科用図書の見本本を展示

3 施設の貸与及び利用状況

4 令和６年度研究所職員一覧

施設の貸与及び利用状況

１　施設の貸与

教育研究所の施設を、教育意義のあるものに限り開放している。原則として次のような事業について開放している。

（１） 教育大学との連携事業
（２） 学校教育など幼児、児童生徒に関する事業
（３） 市教育研究団体及び学校職員の研修活動に関する事業
（４） 地域連携型及び市民開放型の事業

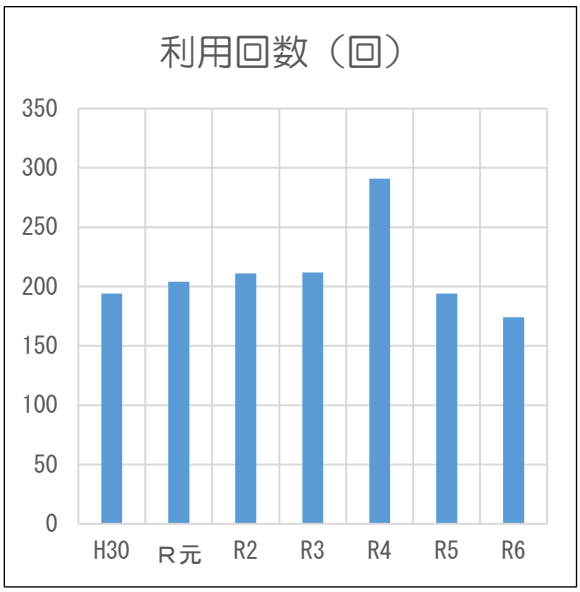
仲間づくり子ども会議

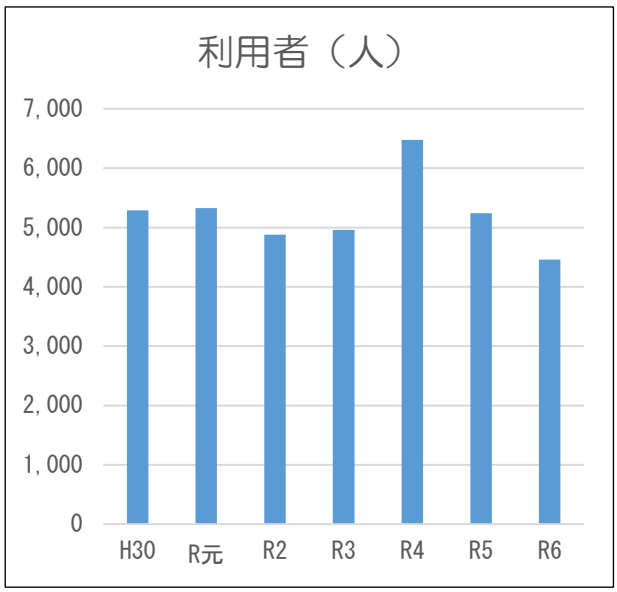
２　施設の利用状況

平成３０(2018)年度～令和６(2024)年度における教育研究所の施設の利用状況は次のとおりである。オンラインによる会議等も継続しながら、対面での研修事業・教職員の養成講座・諸会議等、幅広く利用されてきた。

なお、令和６(2024)年度の利用回数及び利用者数（※）は、１月末現在の数字である。

年　　度	利用回数（回）	利用者（人）
平成 30(2018)年度	１９４	5,289
令和元(2019)年度	２０４	5,327
令和２(2020)年度	２１１	4,878
令和３(2021)年度	２１２	4,960
令和４(2022)年度	２９１	6,475
令和５(2023)年度	１９４	5,240
令和６(2024)年度	※１７４	※4,457





令和６年度研究所職員一覧

１　令和６年度岩見沢市立教育研究所運営委員

役　職	氏　　名	区　分	所　　属
委 員 長	山　本　理　人	学識経験者	北海道教育大学岩見沢校
副委員長	細　木　隆　浩	学校関係	岩見沢市校長会
委 員	黒　島　　敏	学識経験者	北海道岩見沢緑陵高等学校
委 員	大　塚　浩　介	社会教育	岩見沢市 PTA 連合会
委 員	中　川　美　愛	社会教育	岩見沢市 PTA 連合会
委 員	杉　澤　圭　子	社会教育	いわみざわ男女共同参画プラン推進市民会議
委 員	大　和　　勝	社会教育	岩見沢青年会議所
委 員	岡　　嘉　彦	社会教育	岩見沢市文化連盟
委 員	石　川　晃　生	学校教育	岩見沢市教頭会
委 員	澤　田　康　二	学校教育	日の出小学校
委 員	高　橋　亮　平	学校教育	東光中学校

２　令和６年度岩見沢市立教育研究所職員一覧

職　名	氏　　名	所　　属	新・再	所属部会
所　長	砂　川　昌　之	教育研究所	再	教・情部会
専任所員	伊　藤　祐　輔		新	道徳科部会
	廣　瀬　一　仁		新	教・外部会
	木　村　　吏		再	（管理業務）
所　員	黒　坂　俊　介	第二小学校	新	道研連・情報教育部会
	石　川　亜　紀	栗沢小学校	再	道研連・外国語部会
研究員	髙　橋　　周	南小学校	新	教科等部会部長
	端　﨑　元　気	幌向小学校	新	道徳科部会部長
	宮　本　将　輝	北村小学校	再	外国語部会部長
	平　尾　　陸	上幌向中学校	新	情報教育部会部長
専門員	石　田　　渚	中央小学校	新	教科等部会
	戸　井　一　貴	東小学校	新	
	川　上　　透	日の出小学校	新	
	辻　浦　一　裕	光陵中学校	新	
	阿　部　駿　也	東光中学校	新	
	米　澤　輝　彦	豊中学校	新	道徳科部会
	坂　下　邦　子	志文小学校	新	
	多　田　彩　乃	第一小学校	新	
	峯　田　久　美	北真小学校	新	
	茂　泉　繁　明	清園中学校	再	
	髙　嶋　裕美子	北村中学校	再	外国語部会
	竹　田　吉　子	美園小学校	新	
	大　滝　千　夏	明成中学校	新	
	西　藤　秀　美	栗沢中学校	新	
	中　村　太　志	岩見沢小学校	新	情報教育部会
	田　中　健　太	メープル小学校	再	
	柴　田　　諒	緑中学校	新	